

四国地方における中津Ⅰ式土器成立期の一様相 － 愛媛県西山奥谷遺跡出土の縄文土器群を中心に －

幸泉満夫・高木朋美・前田友香・畠中航志・菅百恵

1. はじめに

2011(平成23)年、現在の愛媛県今治市と松山市の境界にほど近い旧菊間町(現今治市)で縄文時代後期初頭、中津Ⅰ式成立期に関わる資料群が纏まって出土した。西山奥谷遺跡である。

同遺跡の2次調査区(愛媛県埋文調査地点)で検出された土坑SK1、および遺物包含層の第Ⅶ層からは、ともに中津Ⅰ式成立期¹⁾前後に限定された土器群が得られている(眞鍋・池尻編2012)。今回、愛媛大学法文学部の考古学Ⅱ研究室では、愛媛県教育委員会および愛媛県埋蔵文化財センターのご理解とご協力のもと、西山奥谷遺跡の未公開ピックダウン資料(縄文土器口縁部片)一式を借用し、新規の図示公開はもとより、新たな研究シーズの開拓に向けた各種の研究を学生達とともに試みることとなった(写真1)²⁾。

同未公開縄文土器群のうち底部片、合計83点については、既に図示公開を終了しており(岩田・宇藤・幸泉2018)、本稿は同プロジェクトの第二弾となる。前稿では、深鉢・鉢底部片83点を新たに図示公開し、その製作技法上の特徴等を明らかにするとともに、系統分類のうえ縄文中期末～後期初頭に至る連続した三小期の存在を指摘していた。

第二弾となる本稿では、学史整理ののち、第3章にて未公開口縁部片全点の図示公開を果たす。そのうえで、後半の第4～5章では既存報告資料を含めた出土縄文土器全点に対する各種の考察を進めたい。具体的には第4章でまず編年、文様系統に関する論考を、つづく第5章では学生達により器面調整、縄文原体、色調、器厚、ならびに深鉢口唇部の仕上げ方といった製作技法に関する各種一連の諸属性に対して、各々分担して考察を試みる。最後に第6章として、成果と学史上の課題を整理し、今後の展望へと繋げたい。

なお本稿は第1～4章を幸泉、第5章第1節と第2節を高木、第5章第3節を畠中、第5章第4節を前田、第5章第5節を菅が分掌し、巻末の第6章を幸泉が総括した。



写真1 西山奥谷遺跡未公開資料の採拓作業風景
(愛媛大学法文学部内)

○ 愛媛大学法文学部准教授 幸泉満夫(KOIZUMI Mitsuo)
愛媛大学法文学部 学部生 高木朋美(TAKAGI Tomomi)・前田友香(MAEDA Yuka)
畠中航志(HATAKENAKA Koji)・菅百恵(KAN Momoe)

2. 関連学史

(1) 愛媛県域周辺の中津式土器に関する学史

愛媛県域における中津式土器研究は1956年、松岡文一(以下、敬称略)が『東洋史談』第49號誌上で発表した西条市市倉(いちくら)遺跡出土の土器14片に対する評価を嚆矢とする。氏は、それらの土器片のなかに「岡山県浅口郡中津貝塚出土土器の手法によく類似した点がある」と指摘し、暗に両者の関係を予察した(松岡1956,p6)。もともと、図示された該当土器片1点は全面LR縄文地に幅2~3mmの繊細な横走沈線二条が平行して描かれた深鉢、ないし鉢の胴部片であり、今日的には縄文後期中葉に比定されるものである³¹。松岡自身論じているように、1950年代当時の四国地方における縄文土器編年はまだ殆ど空欄状態であった(三森1938等)。中津貝塚出土土器に対する認識も1935年私費出版の水原岩太郎による『中津貝塚発見縄文式土器模様』が知られていた程度であり(水原1935)、標式資料の実見も容易ではなかった当時の事情を鑑みれば、中津貝塚出土土器との類似を疑った事情もやむを得ないだろう。

因みに松岡の論考中には、1956年以前の段階で把握されていた愛媛県内の縄文遺跡、計10箇所が存在が記されている。このなかで、今日でいうところの中津式土器が含まれていた可能性のある遺跡は唯一、西条市(旧周桑郡三芳町)の椎ノ(之)木遺跡のみであるが、この時点では、まだ内容が充分には認識されていなかったとみられる(長井編2001ほか)。

1961年には愛媛大学の西田栄が愛媛県下の縄文土器について広く考察を試みている(西田1961)。氏の集成では県内の縄文遺跡は33箇所にまで増加していた。しかし西田はまだ磨消縄文や沈線文による土器の全てを平城式と西平式の二者択一でしか評価しておらず、今日でいうところの後期初頭前後の土器片に関しても、平城第一類abの表現で済ませている。別途、四国中央市(旧土居町)の藤原遺跡では1956年の遺跡発見以降、中期末~後期初頭の土器片が複数採集されていたが、これらも氏は全て平城第一類として処理しているのである(西田1961,p36)。

このように、愛媛県下の縄文後期土器に対して模索が重ねられていた1950~1960年代は、ちょうど考古学関連の一般向け概説書、河出書房版『日本考古学講座』第3巻や河出書房版『日本の考古学Ⅱ』、さらには雄山閣版『新版考古学講座3』が相次いで発刊された頃でもある。既に山陽側では鎌木義昌、松崎壽和、間壁忠彦、潮見浩、高橋讓等により後期初頭に位置付けられていた中津式前後の編年大綱が整備されはじめていた。瀬戸内周辺もまた、地方編年構築に向けた気運が急速に高まりつつあったのである(鎌木・木村1956、鎌木・高橋1965、間壁・潮見1965、松崎・間壁1969)。なかでも松崎・間壁は『新版考古学講座3』のなかで「磨消縄文の確立」を小テーマに、中津式の諸特徴についても詳しく論じている(松崎・間壁1969,p250-253)。そこでは京都府北白川小倉町遺跡出土の「縄文に沈線文」を施した土器を関東における加曾利E式の「ごく新しいものと関係」する中期末の土器であろうと仮定したうえで、中津式の祖型と推論した点や、中津式標式資料群のなかに「磨消縄文」、「沈線文」、「無文」の三系統が共存する事実を明記している。のち今村啓爾や泉拓良、玉田芳英等の基礎理論へと発展する基盤が、既にこの段階で築かれていた点は刮目に値しよう。

以上の全国レベルでの相次ぐ概説書刊行にも少なからず触発されたのであろう、1960年代後半

～1970年代には愛媛県下でも関連遺跡数が飛躍的に増大している。長井数秋による1973年2月時点で縄文遺跡総数は86箇所、うち後期は78箇所と記された(長井1973,p28・34)。こうした資料の充実を受けて地元の長井、犬飼徹夫、十亀幸雄等により後期前半の土器編年が本格的に構築されはじめたのである。具体的には先の山陽側における編年大綱との対比により、各併行期に対する独自型式の設定が相次いでいる(長井1967・1969・1973・1976、犬飼1975ほか)。

うち中津式併行期に関しては1966年、長井が西条農業高校史学部の生徒達とともに六軒家遺跡群の存在を発見、その翌年に『西農史学』第7号誌上で発表した西条市(旧三芳町→旧東予市)六軒家Ⅰ遺跡採集土器の図示公開が、学史上の転機となった。氏は、既に沈線文系の存在にも気付いており「磨消縄文と共に条痕文の素地中に曲線的な沈線文を施した土器が出土している点」にも留意すべきと結んでいる(長井1967,p33-35)。

上記六軒家の比較的纏まった新資料群をもとに、氏は同出土土器群を「中津式土器に近似する土器群」と位置付け「中国地方の中津式土器の影響を強く受けたもの」と断定した。そして、かつての西田による平城第一類としての一括評価に疑念を呈するとともに、「明らかに相違する点が認められることから、同一視することはできない」として、1969年、新たに「六軒Ⅰ式」を提唱したのである(長井1969,p33-41、筆者註：1973年以降の論文では「六軒家Ⅰ式」と改称されている)。ただし六軒家の標式資料は発掘によらない表採資料であり、かつ絶対数も限られたため、山陽の中津式とを峻別できるほどの識別基準が定められなかった。ともあれ、愛媛県域の中津式併行期の土器として、六軒(家)Ⅰ～Ⅱ式の存在は、地元でも受け容れられていくのである。のち1975年に今治市(旧波方町)水崎遺跡(大角鼻海岸)採集の土器群を整理報告した犬飼徹夫も、該当する「大角鼻Ⅴ」群土器に対して「山陽筋から芸予諸島を経て西四国地域へ伝播した」、「キースティシヨンの役割を担った」と長井に準じた評価を下し、六軒家Ⅰ式を肯定的に採用している(犬飼1975,p18)。

1981年には十亀幸雄が地元愛媛における遺跡発行会の例会で「愛媛県における中津式について」を発表し、同年刊行の機関誌『遺跡』第20号に論文として纏めている(十亀1981)。ここでは岡山県倉敷市の中津貝塚、建業田(日羽ケンギョウ田)遺跡出土土器をもとに各種文様に対する分類基準を設定、愛媛県内の主要土器(岩谷、六軒家、前田池、水崎、叶浦(B)、小松川)を分類して長井、犬飼と概ね同等の見解を披露した。加えて氏は、長井が中津式導入の回廊と見做した芸予諸島について「中津Ⅰ式が検出されていない」ことに着目、愛媛県域への中津式導入は同Ⅱ式以降と解釈することで、新たに山陽以東との時期差を想定したのである(十亀1981,p14)。

1982年には『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』が刊行された。ここで後期土器編年を総括した犬飼もまた、十亀の見解をほぼ踏襲している。後期初頭に関しては「最古式に属するとされる中津式土器は、県下では存在しない」と言及、山陽の中津式を「ほぼ変容することなく伝えるもの」、「明らかに東からの波及が看取できる」等と断じて、東方からの集団移住を伴った強い波及により愛媛の中津式、六軒家Ⅰ式が成立したと結んでいる(犬飼1982,p56)。以上の論法は、当時まだ北白川C式をはじめとする中期末段階の存在が愛媛県域で充分意識されていなかった事情を鑑みれば、概ね矛盾のない解釈であったと回顧されよう。



写真2 江口貝塚第2次調査現地説明会風景
(愛媛大学法文学部考古学研究室)

さらに1986年には『愛媛県史 資料編考古 I』が刊行された。後期初頭の関係資料についても1960年代以降、地元の研究者達によって蓄積されてきた資料群が網羅的に公開されて、当時の四国地方としては最も充実した研究環境が整えられたのである。同書の執筆と編集に関わられた西田栄、長井数秋、大飼徹夫等の先学諸氏には改めて敬意を表したい。ただし県史編纂という一大事業以降は上述の伝播移住説が支配的となり、これを前提に福田K2式併行期以降、すなわち小松川式から宿毛式を経た伊吹町式段階までの様相に地元

学界の関心事が移行していく。

こうした流れのなか1988年、今治市(旧波方町)で江口貝塚が発見された。そして翌1989年以降、新たに愛媛大学法文学部(当時)の宮本一夫を中心とした同大学考古学研究室により、精緻な学術発掘が開始されることとなる。調査は、当時最高水準の学際的な学術発掘によるもので、愛媛県下では前例のない画期を迎えた。成果としてⅢ区第2層、Cトレンチ第5層より中津式併行期には限定された良好な短期間形成包含層資料群が、さらにAトレンチ第5層下部等からも膨大な関連資料が得られており、後期初頭前後に対するより広域的な視座からの位置付けが可能とされていった(写真2:宮本編1991・1993・1994ほか)。

以降、1990～2000年代にかけては行政主導の大規模緊急発掘も相次いだ。なかでも本四連絡橋(しまなみ海道)関連や縦貫自動車道建設関連では、従来にない膨大な数量の関連資料が蓄積されるようになる。愛媛県埋蔵文化財(調査)センターによる今治市叶浦(B)遺跡、糸大谷遺跡、亀ヶ浦遺跡、ハゼヶ浦遺跡、辻堂遺跡、西条市(旧小松町)鶴来が元遺跡等の調査がその代表例である。また近隣市町村でも今治市石井国友遺跡など、この当時は、毎年のように成果が相次いだのである。

(2) 中津式土器研究をめぐる近年の学史的動向

上記開発に伴う発掘件数の増大は無論、国内のほぼ全てで共通しており、縄文後期初頭併行期の土器資料は日本中で山積していた。こうした事態を見通し、はやくも1985年には横浜市で「称名寺式土器に関する交流研究会」が開催された。西日本からは、泉拓良が中期最終末土器群を、玉田芳英が中津式に関する基調報告を行っている(泉1990、玉田1990)。そして上記学会の成果も踏まえつつ1989年に小学館より刊行された『縄文土器大観4』では、玉田が「中津・福田K2式土器様式」を担当している(玉田1989)。氏は今村啓爾による中津I・II式編年をさらに三段階に細分し、口縁部文様帯の「鏡り上がり現象」を主な指標に中津I式を古段階、新段階に二分した。玉田によるこの三細分編年案は以降、広く西日本のなかで採用され、今も共通理解とされ続けている

る。

2004年には、第15回中・四国縄文研究会が「中津式の成立と展開」をテーマに徳島市内で開催された(写真3)。ここでは岡山県立博物館の佐藤寛介が、長らく未公開であった中津貝塚標式土器の纏まった図示公開を果たした点がまず特筆されよう(佐藤2004ab)。次いで西瀬戸内を担当した幸泉は、愛媛県域における中津式併行期の土器を遍く集大成するとともに、同会2日目の討論会では改めて、今村や玉田による統一編年基準に沿わない磨消縄文系の一派、横位連携多段意匠群(当時、未命名類型と表現)や、在地色の強い沈線文系、刻目素文系、無文系の存在を強調している。うち磨消縄文系の多様性に関しては愛媛県域にほど近い徳島県東みよし町の大柿遺跡(光下新町線関連)における最新事例を掲げつつ、西瀬戸内側では縄文中期末段階よりポジ=ネガ現象や横位連携多段化傾向が盛んに認められることを指摘した。翌2005年に刊行された大柿遺跡(光下新町線関連)の報告書では、幸泉が正式に「大柿類型」を提唱している(幸泉2005)。今村、玉田による中津Ⅱ式の広域指標については一部見直しを要することに加え、同Ⅱ式成立の要因として、西からの影響を再評価する必要があるとした。

2008年、奈良女子大学で開催された第9回関西縄文文化研究会では、そうした西瀬戸内の特質が中期の里木Ⅱ・Ⅲ式に由来し、中期末の磨消縄文系伝播以降も自立的に存続し続けていたことを論じており、当時、既に一定の賛同を得ている(幸泉2008ab)。

2008年にはアム・プロモーションより「総覧縄文土器」が発刊される。中津式については新進の石田由紀子が担当し、これまでの学史整理とともに地方差や文様系統差にも配慮した、より精緻な解説が加えられた(石田2008)。うち編年では、新たに古段階として「中津(式)成立期」を新設するとともに、中津式を中段階、福田K2式を新段階としたうえで、玉田の中津Ⅰ式古段階を「中1段階」、中津Ⅰ式新段階～同Ⅱ式を「中2段階」と再整理している。もともと石田の「中2段階」はまだ細分が可能なのは明白であり、今後さらなる議論を要するだろう。氏の論考では「中津(式)成立期」の新設が特筆されるが、一方で従来の中期終末段階、特に瀬戸内以西との関係についての言及が避けられたこともあり、指標として掲げられた個々の土器に対する帰属時期の定まらない点が課題視されよう。

2016年には再び、横浜市にてシンポジウム「称名寺貝塚と称名寺式土器」が開催された。西日本からは、今度は石田と千葉豊が研究発表を行っている(石田2016、千葉2016)。ここで石田は上記の「総覧縄文土器」で古段階と表現した「中津(式)成立期」の編年の位置付けを焦点に、改めて、前段の北白川C式との関係を踏まえた研究成果を発表している。しかしながらやはり、焦点となる



写真3 第15回中四国縄文研究会徳島大会の討論風景
(2004年6月27日:徳島大学工学部/幸泉撮影)

北白川C式IV期との峻別基準が曖昧といわざるを得ない内容であった。結局のところ、かつての玉田の中津I式古段階の評価とも重複してくるのだが、鈴木徳雄による三原則⁴¹、すなわち整然とした帯状部意匠描出による交互縄文施文や沈線不交叉の各基準(鈴木1990・1993)を中期と後期とを画する広域指標と定めるならば、石田の提起する「中津(式)成立期」の標式資料には未成立資料が混在しており、中期最終末との線引きを一層困難にしている点が課題視されよう。あるいは仮に鈴木の上三原則に異論を唱えるのであれば、学界の理解が得られるほどの新たな絶対基準をまず示す必要があろう。そうした整備が成されない以上、鈴木の上三原則は厳守すべきであり、これを貫徹させるならば、石田の「中津(式)成立期」には中期最終末から後期最古相までが混在すると解釈せざるを得ないはずである。例え、両者が全く同時期に製作された一括資料であったとしても、それらを型式学的に分別し、後期初頭の絶対基準を明確にさせてこそ、はじめて、考古学の学問としての意義が成り立つのである。これはかつての、定義の曖昧さに端を発した「矢野K式」をめぐる議論とも通底した、理論上の未成熟さの一端を示すものといえよう(幸泉2010c)。

別途、同会で関西の後期初頭土器問題を纏めた千葉豊は、長年着目し続けてきた徳島県矢野遺跡出土の中津式土器群に対する編年試案を発表している(千葉2016)。すなわち窓枠状区画文を配する一群を「矢野第2段階」と定め、矢野3区第5層(第VII層)を中心とする磨消縄文未成立の一群を「矢野第1段階」と分別したうえで、同第1段階を「後期最初頭」と新たに表現している。ここでも、鈴木の上三原則は完全に棚上げされてしまっているといわざるを得ない。先の石田による「中津(式)成立期」が、千葉による上記編年案では概ね二段階に吸収されている点が両編年案の相異点となろう。千葉はさらに石田編年よりも一段、後期の開始時期を早めたことになるのである。一方で、従来の中期最終段階の評価に曖昧さを隠せない。何れにしても、中期最終段階に対する北白川C式IV期以外を含めた総合的な再整備がこの場合、欠かせないであろう。少なくとも、誰もが識別可能な、納得のいく基準づくりが望まれるべきなのである。今後とも新たな議論を呼びそうである。

このように後期初頭の定義すら定まらないなか、幸泉もまた、2018年には改めて渦中の徳島県域に対する当該期編年の再整備を試みている(幸泉2018c)。まず徳島県大柿遺跡第13遺構面直上と第13包含層の連続した層位事例をもとに中期最終末(Stage2最新相)の存在を再確認した。そのうえで、矢野遺跡に関しても3区SB6003・SB6006資料群を定点に型式学上、中期最終末と後期初頭の最古相(Stage 2最新とStage 3最古相)に区分が可能と評価し、中期と後期の線引き基準についてはやはり、原点ともいべき鈴木の上三原則に沿った「磨消縄文完成」の是非に基づくべきであると主張している⁵⁰。

この時期、共存する沈線文系や口縁刻目帯系統、阿高系統、刻目素文系統、そして無文系統の評価、および相互関係に至っては、未だ、解明を目指そうとする気運に乏しい⁴⁶。いわんや個々の器種差や製作技法、あるいは視覚性といった観点からの追究は遅々とした進展でしかない(幸泉2008aほか)。西日本における縄文後期初頭という大画期を土器文化の側面から再評価し得る余地は、今後まだ、相当に広いといわざるを得ないだろう。

(3)本稿の目的

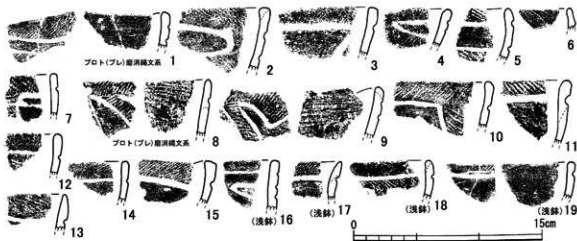
以上のような長い学史的動向と相前後して、2011年、西山奥谷遺跡が発見された。新たに西瀬戸内で後期初頭の最古相に限定される纏まった資料群が検出された意義は、大きいといえるだろう。1956年の松岡による指摘開始以降、実に半世紀以上を経てなお不明瞭なままであった西瀬戸内における中津I式成立期前後の様相を具体的に再検証し得る機会が、ようやく到来したからである。無論、西山奥谷の縄文資料群を学術的に正しく評価するためには優品資料の評価のみならず、無文、小片を含めた当該出土資料全点の徹底研究こそが基盤であり、これを省いては、新たな研究の進展は望めない。以上が、本稿を提起するに至った学史上の経緯である。

3. 未公開資料

本章で公表するCランク以下の未公開資料一式は、2012年の報告書刊行後も県教委所管の文化財保管庫で大切に一括収納されてきたものである⁷⁾。以下、まずは第1～4図をもとに全ての図示公開を果たしておこう。

(1)磨消縄文系統

第1図では、磨消縄文系の土器片を纏めた。うち1～15は深鉢・鉢、16～19は浅鉢である。1は緩波状口縁を呈し、外面には狭義の磨消縄文を加える深鉢口縁部片。単節LR縄文を広範囲に施した後、二条を単位とする緩弧状の区画沈線を配し、沈線間のみを撫で消して無文帯としている。一部に消し残された縄文の痕跡も窺える。2～4・7は口縁部にいわゆる窓枠状区画文を配し、区画内を無文とする一群。沈線が太く凹線に近い2・3と、細線で構成される4・7のような2パターンがある。第5章で考察する縄文原体の問題とともに、多様な在り方を示している。うち4は短辺が省略されてレンズ状を成す例で、西瀬戸内ではよく散見される意匠である。5・



第1図 西山奥谷遺跡出土の未公開縄文土器(1)

6・12・14も同等の意匠構成を成す可能性がある。縄文原体では3・4・14が単節LR縄文を示すのに対して、2・5～7・12は単節RL縄文を採用する。また7のように上下段で施文方向を90度前後反転させる、いわゆる充填縄文手法も盛んである。8は沈線区画がレンズ状ないし紡錘状の意匠が重畳する例。小片のため断定は困難であるが、右端の沈線が縄文間を貫入している点に着目するならば、磨消縄文完成前のプロト(プレ)磨消縄文系に属することになろう。縄文は単節LR縄文であるが、こちらも沈線施文後の充填施文である。内面には、横位の巻貝条痕が粗暴ながら鮮明に施されている。9もまた似た文様構成を展開させている。ただし、こちらはクランク状の区画沈線が不交叉、一筆描となり、縄文無文の交互施文も貫徹されている。つまり、型式学的にみて8よりも一段階程度新しいと捉えることができよう。こちらも典型的な充填縄文である。口縁部の縄文が単節LR縄文を示すのに対して、その下段では90度前後の反転施文を採る。内面は、8と同様明瞭な横位の巻貝条痕で仕上げられている。10・11・13・15は口唇部形状や施文工具の特徴から口縁部の窓枠状区画が崩れ、頭部文様帯との一体化を示す可能性のある破片である。なかでも11・15は第4～5章で再び扱うように、口唇部内縁に面取り等の新たな技法が加わっている。周縁他遺跡の諸例との比較から中津Ⅰ式新段階に下る可能性が思料されよう。16～19は磨消縄文系の浅鉢片である。16は底の広い低筒形を呈すると考えられる例である。内外とも研磨により特に丁寧に仕上げられている。

(2) 沈線文系統と阿高系統

第2図では沈線文のみの一群を纏めた。44以外は全て深鉢・鉢である。20は内面にまで影響を及ぼす太く明瞭な凹線文(太形凹線)が巻貝条痕地に描かれている(写真4)。九州阿高系に属する例である。愛媛県域での出土は極めて稀であるが、過去、今治市大三島の満越遺跡(長井1995)や旧波方町の江口貝塚(宮本編1994)、砥部町の城ノ向遺跡B区(岡田編1981)等でも極少量の出土が確認されている。さらに阿高系のうち同種のタイプとなると、隣接する周防灘、豊後水道沿岸に存する北九州市加治屋敷遺跡1区(木太久編2005)や大分県宇佐市西和田貝塚(坂本編1979)、大分市(旧野津原町)下原遺跡(吉田・坂本編1997)、大分市横尾貝塚(塩地・松永・古川編2008)のほ

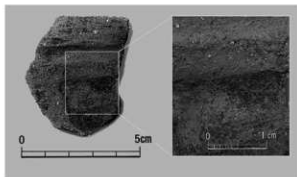
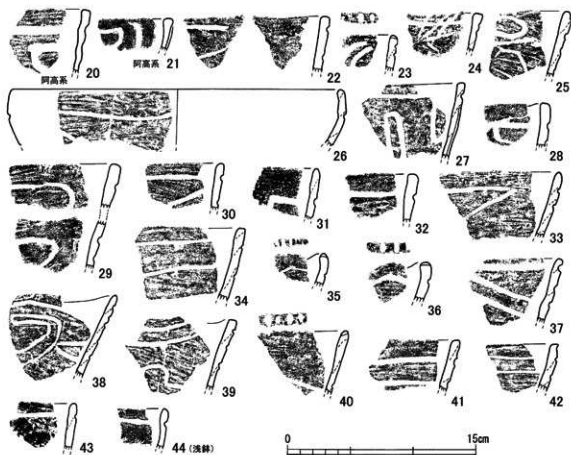


写真4 西山奥谷遺跡出土の阿高系土器
(第2図20/愛媛県蔵/幸泉撮影)

か、山口県上関町田ノ浦遺跡(谷口編2011)など分布エリアが東九州域に限られてくる。いわゆる周防灘西岸を中心に分布する阿高系の一派、西和田式に比定できるであろう。20に関しては幅7～8mmに達する太形凹線(写真9-④)の態様から、中期終末段階まで遡及する可能性が高いとみられる。対する21はナデ地で凹線が幅5mmと太沈線化しており、内面への影響も失われている。ただし縦位短沈線と楕円形区画文から成る文様構成から、同じく西和田式のセーリエ上に



第2図 西山奥谷遺跡出土の未公開縄文土器(2)

指定できるだろう。もっとも20・21ともに口唇部における細波状の大振刺突が付与されていない点を鑑みれば、西和田式としては亜流と見做すべきかもしれない⁸⁵。胎土色調は、ともに伴出の沈線文土器群と大差はない⁹¹。

22～44は全て沈線文系統である。うち22～24は沈線文の遊離や交叉が認められる一群である。こうした施文パターンは後期初頭、磨消縄文系の中津式には原則窺えない。一方、広島県蒲刈町の沖浦遺跡(川越ほか1986)や福山市宇治島北の浜遺跡(川越ほか1984)、岡山県倉敷市の矢部奥田貝塚(朝倉編1993)など、瀬戸内地方でも中期末の諸例のなかに一定の類例が見出せる。25は、口縁端部より約2cm下がった位置に一条の太沈線を横走させて、口頸部文様帯とを二分している。同描線はいわゆる口縁部文様帯の下端部区画意匠を意図するもので、僅かながら徳島県石井町の石井城ノ内遺跡(岡山編2003)等でも類例が窺える。中期末の北白川C類型や矢部奥田類型に準ずる例であり、中期終末段階に指定できよう。26は横位の明瞭な巻貝条痕地に、極めて緩やかな波状沈線文が二条以上、横位展開で描かれている。口縁部の内湾も比較的強く、里木Ⅲ式新段階の伝統を継承した中期終末～後期初頭古段階の間に帰属しよう。27は口縁端部から約1cm下がった位置に一条の沈線を横走させ、以下、頸部にかけては縦長楕円の独立垂下区画文を配している。うち右端の区画意匠に関しては口縁の横走沈線と連結して、後節写真7の頸部文のようなアクセ

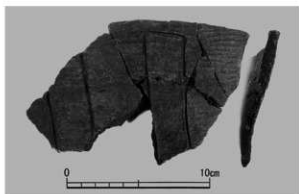


写真5 縦位連続垂下区画文を施す沈線文系の類例
(江口貝塚1次Ⅲ区第2層出土/今治市蔵/幸泉撮影)

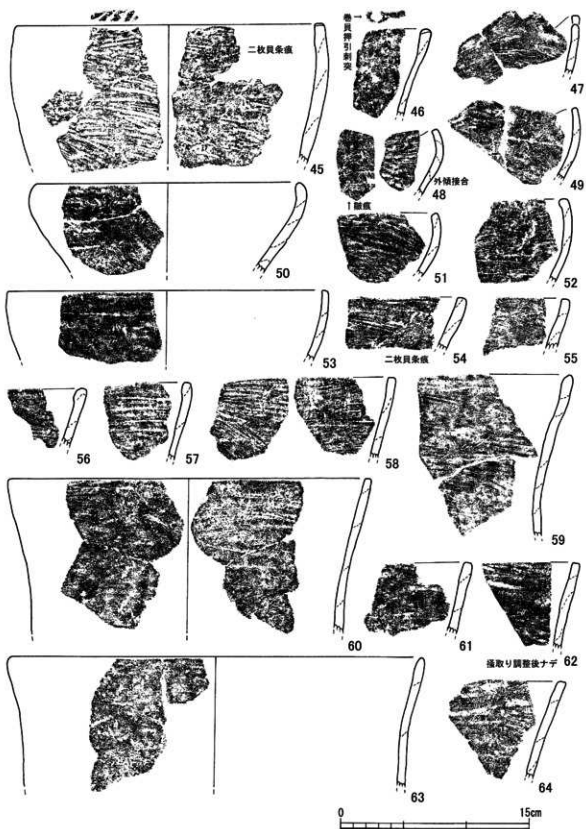
ント状の垂下文を表現している可能性も思料されるのだが、欠損のため判断がつかない。縦長垂下区画文については今治市(旧波方町)江口貝塚の1次調査Ⅲ区第2層(宮本編1991)でも確認できる(写真5)。しかしながらやはり、数は少ない。そもそも同意匠の淵源が関東、加曾利EⅣ式に伴う半精製の「併行垂下文類型」(稲村1990ほか)、「垂下隆帯類型」(石井2016ほか)に求められるためである(いわゆる関西の天理C式なども同系列)。28～34は独立区画文類型(幸泉2001ほか)である。磨消縄文系のような二条単位の

帯状意匠ではなく、原則として、一条沈線による独立した区画文から構成される。なかには29のように複数段重畳する可能性のある個体も存在する。区画文の両端がレンズ状を成す30・33のような簡略施文タイプは、先の磨消縄文系と同様、沈線文系にも散見される。35～44は幾何学的な意匠を描く一群であるが、多くは小片のため、文様構成の復元は困難である。緩波状口縁を成す38・39は大振りの渦巻文を条痕地に描く例で、磨消縄文系からの影響が想定できよう。35・36も波状口縁を成す点で、磨消縄文系と通じた意匠を採る可能性がある。41～44は平縁に、平行した横走直線文を描いている可能性も思料されるが、やはり小片のため判断が難しい。うち44は沈線文系唯一の浅鉢である。

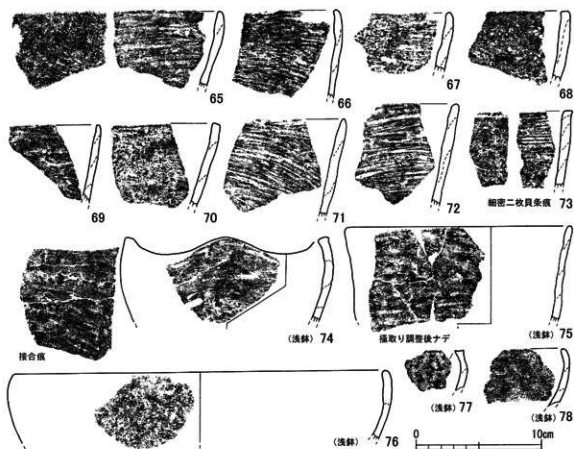
(3) 無文系統

第3・4図には無文系土器を纏めた。45・46は口唇部に刻目を付加する砲弾形の深鉢である。このうち45は推定口径24.8cmと中形ながら、器厚が9～10mmと極端に厚い個体である。口唇の刻目はヘラ状工具による。色調、胎土に関しては特異とはいえないものの、外来土器の可能性が高いと考えられる。46は口唇部の刻目が巻貝押し刺突によるもので、本遺跡では他に類例がない。47～53は内湾口縁を呈する無文系深鉢である。うち47～49は波状縁を成す土器。器形的には磨消縄文系に準ずるであろう。波頂部に凹点を付す47のみは外面明赤褐、内面灰赤色を呈しており、後述するように外来土器の可能性が極めて高い。また48も外縁接合を示す点で特異といえるだろう。強い内湾成形のため、外面には皺痕と顕著な接合痕の露呈が看取できる。54～59は端部を弱く内傾させる一群である。うち56・57は端部内縁を僅かに肥厚させている。54は外面を二枚貝条痕で仕上げている。こちらも外来土器の可能性が高いと判断されよう。60～64は屈曲形の外傾直口縁を呈する一群である。63以外は口縁端部を平坦に仕上げている(後章第13図分類でいうHR形)。62の外器面調整は山陰～中国山地側に多い掻取り調整後ナデである。

65～73は砲弾形を呈すると推察される無文系深鉢。全て平縁である。65～70のように口縁部が緩やかに内湾する例と、71～73のように直口縁を呈する例に分かれる。口縁端部は丸～尖形



第3図 西山奥谷遺跡出土の未公開縄文土器(3)



第4図 西山奥谷遺跡出土の未公開縄文土器(4)

が多いが(後章第13図分類のMR～SN形)、70・73については平坦(HR)形を採っている。これらは器面に巻貝条痕を残す個体が多いが、うち73のみ、内面に明瞭な細密二枚貝条痕を留めている。73もまた外来土器の可能性が高いであろう¹⁰⁾。

74～78は無文系浅鉢である。75以外は全てボウル形を呈する。このうち74・77は磨消縄文系に準じた波状口縁や突起状口縁を備えている。器面はナデばかりであるが、74は接合痕をそのまま残しており、粗雑な作りである。75は胴部下半の腰部が広い低筒形を呈している。外器面は掻取り調整後ナデと、一層粗く仕上げられている。同種の器面調整は山陰～中国山地側の無文系深鉢に多く認められるが、この手の浅鉢では精製が一般的であり、やや特異な存在といえるだろう。以上のように無文系浅鉢の大半は粗製の範疇で把握される。西瀬戸内における無文系浅鉢出現期の様相を示唆する一群として留意されよう。

4. 既存報告資料を含めた文様系統組成および編年上の位置付け

前節では、西山奥谷遺跡出土の未公開縄文土器群を紹介してきた。大多数が中津Ⅰ式成立期前後の個体であり、四国地方周辺では極めて稀少な事例として学術上、高く評価されよう。そこで本章では、既存の報告資料を含めた当該短期間形成土器群の編年の位置付けに加え、個体数識別調査に基づいた文様系統組成の特徴について検討を深めておこう。

(1) 編年と分類

第5図は、2012年報告の既存報告例を含めた西山奥谷遺跡2次調査区SK1および縄文包含層第Ⅶ層出土の代表例について、型式学的視座から「西山奥谷Ⅰ～Ⅲ」の三小期に区分したものである。

西山奥谷Ⅰ期では縄文中期終末、磨消縄文系完成以前のプロト(プレ)磨消縄文系の段階に措置される個体と、これに伴件すると推察される各文様系統の事例を纏めた。未1、未8のように縄文を加える個体では、まだ交互施文や帯状部意匠描出の原則が成立していない。また文様帯が口縁部のみに集約される報21・32・37は、瀬戸内周辺の諸例と対比しても後期初頭まで下げることはできない。

未20は前章でも注視された阿高系の西和田式土器片である。東九州における西和田式そのものの編年細分が未だ不十分な現状にあり、別途課題視されるものの、太形凹線の態様からⅠ期に属する可能性が高いであろう。

沈線文系についても、口縁部文様帯の区分が明確な報21や未25、また東日本の加曽利E式にみる併行垂下文類型との関連が想定される未27、太形凹線で構成される報22、さらに帯状意匠を採らない未22～24などは、全てこのⅠ期に伴うと想定されよう。

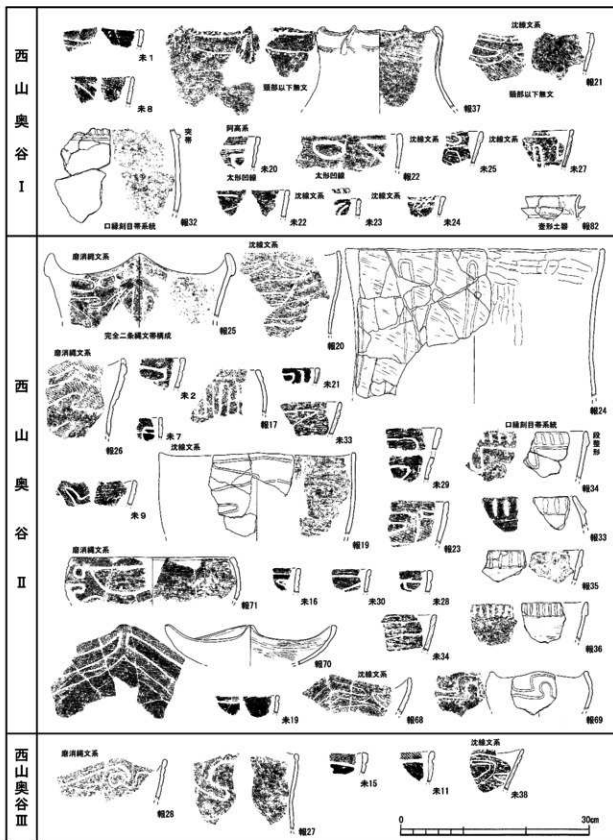
なお報82の壺形土器については当該遺跡では1点のみの出土であり、安定性を欠く。頸部に配される鋭い鐮状の帯状突帯は、總積編年に沿えば中期末段階に準じた特徴を備えており(總積1992)、ここでは西山奥谷Ⅰ期に含めて捉えておきたい。口径8.5cmの小形土器である。

以上は、磨消縄文系完成以前のプロト(プレ)磨消縄文系に併存する段階の一群である。伴出する多様な文様系統の態様、また何れの系統でも、その大半が口縁部文様帯の独立を重視しているのに対して、頸胴部は無文のままとする個体が目立っている。いわゆる中部瀬戸内の矢部奥田類型や北部九州の阿高Ⅲ式、坂の下式等とも通ずることから、本稿ではあくまで、上記Ⅰ期の一群については



写真6 中津Ⅰ式成立期土器

(西山奥谷遺跡第Ⅶ層出土/愛媛県蔵/幸泉撮影)



第5図 西山奥谷遺跡出土有文土器群の編年試案

中期終末と考えておきたい。

つづく西山奥谷Ⅱ期は中津Ⅰ式古段階に相当する。なかでも主体を成すのは縄文後期初頭の最古相、磨消縄文系完成直後の段階である。型式名としては中津Ⅰ式の最古段階(成立期)といった相対的な表現を以下、本節では暫定的に採用しておきたい。幸泉統一編年のStage 3最古相にあたる(幸泉2018cほか)。

磨消縄文系では第5図二段目左上に掲げた報25の存在が一つの指標となろう。別途写真6でも示す通りで、口縁部の窓枠状区画文がまだ、段差によって頸部以下と明瞭に区分されていることがよく分かる。けれども両者を繋ぐ二条縄文帯は既に一体であり、鈴木の新原則が口頸部間で貫徹されているのである。同様の施文原理は後述する報34、写真7からも窺えよう。別途幸泉が2018年に注視した徳島県矢野遺跡第3区SB6003の3(藤川編2003報告No609)とも共通しており(幸泉2018,p34)、これまで認識されてきた中津Ⅰ式古段階がさらに新古二段階に分別可能であることを証明する好資料といえるだろう。報26は口縁部に窓枠状区画文を伴わず、波状パターンを基調とした横位連携の縄文帯が多段に展開する、いわゆる大柵類型を継承した土器である(幸泉2005a・2008ab)。同じく鈴木の新原則が貫徹されていることから、中津Ⅰ式最古段階に指定できる。因みに、この土器のみ縄文原体に中期的な粗く太い撚紐が採用されている。報25との系列差を示唆する可能性があり、興味深い。このほか未2、未7も窓枠状区画文を備えた磨消縄文系であるが、これらは平板な単純内湾口縁へと退化が進んでいる。何れも小片であり、遺存状態がやや劣る。いわゆる学界周知の中津Ⅰ式古段階にまで下るであろう。中津Ⅰ式最古段階との時期差の存在を暗示する一群である。

報17・19・20・23・24、未28～30・33・34は沈線文系深鉢である。外器面には巻貝条痕を明瞭に残す個体が多い。うち報19・20のような波状文類型は、やはりプロト(プレ)磨消縄文系大柵類型との連絡関係を想定せざるを得ない。また報17・24のような縦長垂下区画文は、既述の加曽利E式における併行垂下文類型(垂下隆帯類型)や天理C式等、東方からの影響を受けた一群と解釈できる。遠く、東日本を淵源とする意匠であり、西瀬戸内では中津Ⅰ式古段階まで残らない可能性もたれる¹¹⁾。

九州阿高系との関係が想定される口縁刻目帯系統に関しては、これまで中期末段階にのみ存する短命系統と認識してきた(幸泉2008abほか)。しかしながら今回、報34、写真7の存在から、この文様系統についても後期初頭の古い段階まで存続することが明らかとなった。近年、同じ周防灘に面した山口県上関町の田ノ浦遺跡等でも良好な関連資料群が得られている(谷口編2011ほか)。先の中期終末、報32の例と比較するならば、口縁部の整形が全て段表現へと置換している様が把握できる。また刻目も太く、間隔の広い施文へと変容している。以上は、型式変化上の新たな指標として注目に値しよう。

このほか精製の磨消縄文系浅鉢が一定量伴うようになる。報71を除いて全て緩波状口縁を呈するボウル形であり、同系統の深鉢口縁部をベースに、意匠の再構成が成されていたことが判らるだろう。文様系統構成はシンプルで、深鉢のように口縁部下端に段差を設けるような例は既がない。こうした傾向に対し、石田由紀子は浅鉢のみ先行して磨消縄文の完成をみると理解しているよう



写真7 口縁刻目帯系土器

(西山奥谷遺跡第Ⅶ層出土/報34/愛媛県蔵/幸泉撮影)

した未11・15については何れも小片であるが、口縁端部の整形法が多面形TM③や縁角形EK①(後章第13図参照)へと変遷している点でも識別が可能である。

つづく第6図は、西山奥谷遺跡出土の主要な無文系土器に対して、分類を行ったものである。うち上段は頸部のくびれる深鉢Ⅰ群、下段は砲弾形を呈する深鉢Ⅱ群とする(幸泉2017,p60参照)。右下枠内は無文系浅鉢である。

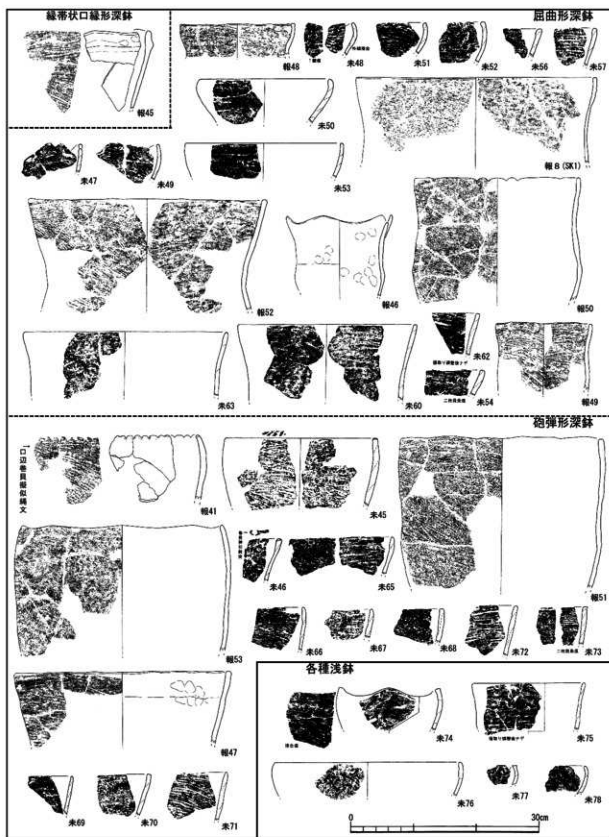
図左上の報45は本遺跡で唯一、口縁部下端を隆帯で区画する土器である。徳島市矢野遺跡(藤川編2004)等、各地の類例から中期終末段階に比定されよう。外器面には明瞭な巻貝条痕が加えられている。

報48～報8までは内弯口縁深鉢の一群。口頸部の整形法から、三段階程度の型式細分が可能である。報48と未48は口縁部を強く内弯成形させる土器群で、中期後半のキャリバー状口縁の名残りを想起させる一群である。型式学的には最も古相に位置付けられよう。つづく未50～52と報8は比較的強い内弯口縁を維持する一群で中相、さらに未47・49・53は頸部から口縁部にかけて括れを伴わず、緩やかに内弯させる一群で、型式学的にみて新相と位置付けられよう。また報49・50と未54のように口縁部が極めて緩く屈曲する一群も型式学上、新しく見積もれる。このうち中相の報8は、西山奥谷Ⅱ期の一括資料であるSK1出土であることから、これらの三段階は中津Ⅰ式最古段階を前後する新古の関係を示唆していよう。このほか端部内縁に微隆帯を設ける未56・57が併存する。これらも中期末から認められるタイプであるが、当該資料群では隆帯が非常に甘い。内弯口縁の形骸化とも解釈できることから、同じく西山奥谷Ⅱ期に帰属する可能性が高いであろう。

報46・52、未60・62・63の一群は、頸部でくびれたのち口縁部が外傾直口する一群である。うち頸部屈曲が相対的に低い位置に設けられる報52・46や未60は、中期特有の長胴形の名残りとも

である。ただし中期末段階の浅鉢からの飛躍を思料するならば、深鉢との変遷差までを明確に捉え得るか否かは、現状では判断が難しいところであろう。ここでは太沈線による報71、あるいは逆に細沈線で表現される報68の沈線文系浅鉢に関してのみ、中津Ⅰ式成立期への帰属性が高いことを指摘するに留めておきたい。

西山奥谷Ⅲ期は極めて客体的ながらも、今回の未公開資料の調査で改めて明らかになった一群である。縄文後期初頭の新相、中津Ⅰ式新段階に措定できる(玉田1989、幸泉2010bほか)。報27・28のように口頸部間において文様系統の一体化が進み、窓枠状区画文が消失した段階と理解できる。本稿で公表



第6図 西山奥谷遺跡出土無文系土器群の分類試案

られることから、Ⅰ～Ⅱ期に比定されよう。口唇部に面取り調整を加えるHR形が少ない点でも内湾口縁の一群と共通しており、周辺他地域の動向を鑑みても、両者はセット関係として共存しているとみるべきであろう。

第6図下段は砲弾形深鉢の一群である。このうち口唇部を刻むK類型は報41・45、未46等の計8点で、組成率は深鉢全体の4%に過ぎない。つまり、無文系統に関する北部九州沿岸域からの影響は比較的軽微といえるであろう。なお報41は、口辺部に広く巻貝擬似縄文を施す稀少例である¹²。報51・53～未71までは口唇部無文のM類型で、西山奥谷遺跡における砲弾形深鉢の主体を占める。似た態様は山陰地方中部域でも認められる。ただし両者の器面調整法を比較すると、西山奥谷では巻貝条痕ないし巻貝条痕後ナデが圧倒的に多いのに対して、山陰中部では掻取り調整や細密条痕、細密二枚貝条痕が多い。山陰地方でも巻貝条痕が一定量併存する点では北部九州よりも親和性が高いといえるが、同じく、一方的な影響を想定することはできない。次章の各個別属性に関する分析結果が支持する通り、これら、西山奥谷遺跡における無文系深鉢の急増は砲弾形を含め、あくまで、西瀬戸内における在地集団の自主選択的な製作意思と用途への志向性の反映に基づいていると理解すべきなのである。

(2) 文様系統組成

第7図は、同じく西山奥谷遺跡2次調査区SK1および縄文包含層第Ⅶ層出土土器のうち、主要の深鉢・鉢口縁部片全点(報告書掲載の44点に未公開分152点を合算)を対象に、文様系統に関する個体数識別調査の成果を纏めたものである。

これによると、全深鉢・鉢中に占めるプロト(プレ)磨消縄文系と磨消縄文系の合計値は僅か12%であり、中津Ⅰ式成立期前後における同種の精製深鉢の割合は北部九州や山陰中部域に準じて、極めて客体的であることが判る。

つづいて中期由来の有文粗製土器として位置付けられる沈線文系、口縁刻目帯系、阿高系の割合であるが、何れも主勢を占めるものではない。このうち比較的割合が高いのは沈線文系統である。他の西瀬戸内における後期初頭の諸例と同様、西山奥谷遺跡でも沈線文系の割合は16%と、磨消縄文系を幾分上回る傾向が看取できよう(幸泉1999・2001・2010ab)。刻目素文系については当該遺跡では皆無であった。中津Ⅰ式最古段階では未だ口縁部文様帯の下端部区画意匠として附帯的に潜在しているのみであり(第5図最上段の報37等)、その独立化は、概ね中津Ⅰ式古段階以降とみることができよう(幸泉2012)。

主体を占めるのは無文系深鉢である。その割合は深鉢全体の68%にまで達している。内訳は、口唇部を刻む無文系K類型4%、全く無文のM類型64%であり、後者が圧倒的な主体を占めている。前節でも触れた通り、これらは頸部の屈曲するⅠ群と砲弾形を呈するⅡ群とに分別される。Ⅰ群は、プロト(プレ)磨消縄文系や在来の里木Ⅱ・Ⅲ式の器形を継承するものであるが、Ⅱ群は、日本海西部の対馬暖流ベルト地帯～東九州域に由来する新器種と見做される。両者の比率はⅠ群:Ⅱ群=60:40であるが、判別の困難な小片資料の存在を加味するならば、一方が卓越するほどの組成差は存しないとみるべきであろう。次章でも改めて検証するが、製作技法上の諸特徴からⅠ

	磨消縄文系	沈積文系	口縁刻目帯系	有文その他	素文系	無文K類型	無文M類型	合計
2012報告書	8	10	4	0	1	5	16	44
未公開 (PICK-DOWN分)	15	22	0	2	0	3	110	152
合計(%)	23(12%)	32(16%)	4(2%)	2(1%)	1(1%)	8(4%)	126(64%)	196

第7図 西山奥谷遺跡出土縄文深鉢・鉢の文様系統組成
(プロト(ブレ)磨消縄文系は磨消縄文系に含めて積算した)

群、Ⅱ群とも外来土器は客体的に過ぎない。つまり、以上の器種組成上の大変化もまた、当該集落遺跡内で自主選択的に遂行されたものであると判断されるのである。

このほか、西山奥谷遺跡では浅鉢と壺形土器が存在していた。それらの出現は西山奥谷Ⅰ期前後とみられるが、浅鉢の定着は中津Ⅰ式成立期にあたるⅡ期以降にまで下る可能性が高いであろう。全器種中に占める浅鉢の割合は30.1%と高い。一方で壺形については0.8%に過ぎない。以降の存続も不明瞭であるが、完全に途切れることもなく後期前葉へと継承されていくとみられる。

5. 製作技法に関する考察 一視覚的・非視覚的諸属性について一

(1) 器面調整法

SK1および第Ⅶ層出土の全ての深鉢・鉢片のうち口縁部片合計113点を対象に、器面調整法に関する個体数識別調査を実施した¹³⁾。なお同一個体片については全て合計1点として換算する(以下、本章(1)～(5)全てで同様)。

器面調整のパターンとしては「①(内面)ミガキ:(外面)ミガキ」、「②(内面)ミガキ:(外面)ナデ」、「③(内面)ミガキ:(外面)巻貝条痕」、「④(内面)ミガキ:(外面)巻貝条痕後ナデ」、「⑤(内面)ナデ:(外面)ナデ」、「⑥(内面)ナデ:(外面)粗いナデ」、「⑦(内面)ナデ:(外面)採取り調整後ナデ」、「⑧(内面)ナデ:(外面)巻貝条痕」、「⑨(内面)ナデ:(外面)巻貝条痕後ナデ」、「⑩(内面)ナデ:(外面)二枚貝条痕」、「⑪(内面)ナデ:(外面)条痕後ナデ」、「⑫(内面)ナデ:(外面)マメツ不明」、「⑬(内面)ナデ後ミガキ:(外面)ナデ」、「⑭(内面)巻貝条痕:(外面)ナデ」、「⑮(内面)巻貝条痕:(外面)巻貝条痕」、「⑯(内面)巻貝条痕後ミガキ:(外面)巻貝条痕後ナデ」、「⑰(内面)巻貝条痕後ナデ:(外面)ナデ」、「⑱(内面)巻貝条痕後ナデ:(外面)巻貝条痕」、「⑲(内面)巻貝条痕後ナデ:(外面)巻貝条痕後ナデ」、「⑳(内面)二枚貝条痕:(外面)ナデ」、「㉑(内面)条痕:(外面)条痕」、「㉒(内面)条痕後ナデ:(外面)巻貝条痕」、「㉓(内面)条痕後ナデ:(外面)巻貝条痕後ナデ」、「㉔(内面)条痕後ナデ:(外面)条痕後ナデ」の24種が認められた(写真8)。「条痕」、「条痕後ナデ」は、調整工具が不明なものを指す。

調査の結果、これらの組成比は①:②:③:④:⑤:⑥:⑦:⑧:⑨:⑩:⑪:⑫:⑬:⑭:⑮:⑯:⑰:⑱:⑲:⑳:㉑:㉒:㉓:㉔=1:2:1:1:31:4:1:11:16:1:2:2:1:4:3:1:2:4:10:1:1:

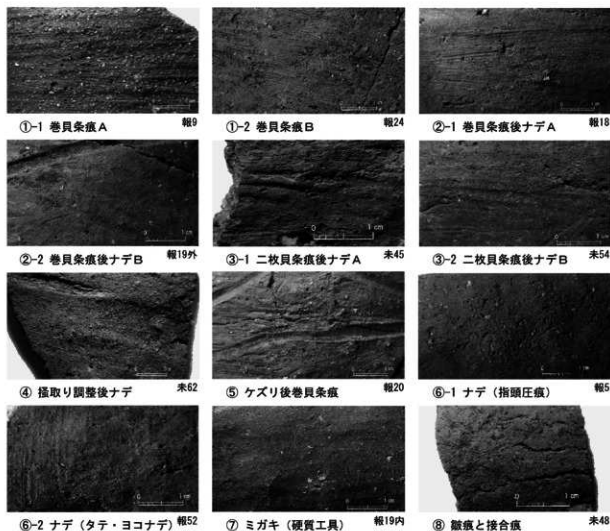


写真8 西山奥谷遺跡出土縄文深鉢・鉢の器面調整法

1:1:1% (小数点以下は四捨五入で換算)で、「⑤(内面)ナデ:(外面)ナデ」が31%ともっとも多く、主勢を占めることが判明した。

第8図に示したように、磨消縄文系統の口縁部片のほとんどがナデもしくは条痕後のナデで器面調整が行われており、条痕を施した後にナデ調整が行われていないものは「③(内面)巻貝条痕:(外面)ナデ」の2点のみであった。また、比較的少数ではあるがミガキが施されているものも見られており、磨消縄文系統には精製土器が多いことが分かる。沈線文系統でも、ナデや条痕後にナデが施されるものが多い。これに対して、無文系統ではナデが多いものの、磨消縄文系統や沈線文系統と比べると巻貝条痕や二枚貝条痕が施されるものが多くなっている。また、無文系統では「⑥(内面)ナデ:(外面)粗いナデ」4点や「⑦(内面)ナデ:(外面)搔取り調整後ナデ」1点のように器面調整が粗いものが見られ、粗製土器が多いことが分かる。しかし、無文系統においてもミガキやナデ後ミガキ、巻貝条痕後ミガキが施されているものも数点見られており、無文系統であって

も粗製土器だけで構成されるわけではないということが分かる。

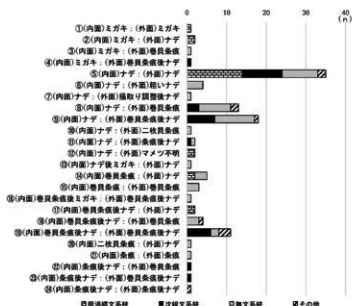
第9図からも分かるように、内面の器面調整法はナデが圧倒的多数を占めている。このことは、この遺跡の特徴ということが出来る。

①～④の内面がミガキのもの、⑬の内面がナデ後ミガキのもの、⑯の内面が巻貝条痕後ミガキのもののように、内面にミガキが施される例が複数見られた。このように内面にミガキが施される例は珍しい。

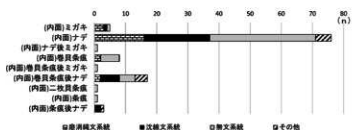
「⑨(内面)ナデ：(外面)巻貝条痕後ナデ」のうち、沈線文系統の口縁部片2点の外面に、二枚貝復縁圧痕が見られた。これらの二枚貝復縁圧痕は、巻貝条痕のなかに薄く跡が残っているような形になっており、施文効果を狙って付けられたものではないと考えられる。このことから、表面調整の前の一次成形の段階で二枚貝の道具が使用されていた痕跡であると推測される。

「⑩(内面)ナデ：(外面)二枚貝条痕」1点と「⑭(内面)二枚貝条痕：(外面)ナデ」1点のように、きわめて少数であるものの、二枚貝条痕が見られた。二枚貝条痕は、後期初頭の西瀬戸内としては極めて稀な存在である。

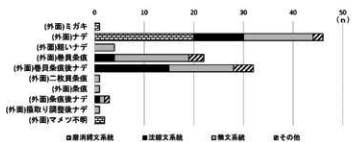
以上、磨消縄文導入期における器面調整法にかかる各パターンを分析した結果、内面にナデが施されるものが非常に多く、内面にミガキが施される例が複数見られる、といったこの遺跡の特徴や、磨消縄文系統では精製土器が多く、無文系統では粗製土器が多いということが明らかとなった。



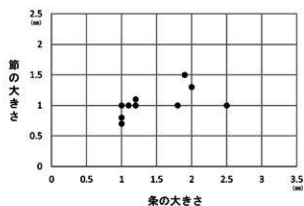
第8図 内面と外面の器面調整法



第9図 内面の器面調整法



第10図 外面の器面調整法



第11図 単節LR縄文の条と節の大きさ

③:④=52:35:9:4% (小数点以下は四捨五入で換算)であった。

次いで各パターンの特徴について述べたい。「①単節LR縄文」は条幅1.0~2.5mm、節幅0.7~1.5mmで、第11図に示すように、条の大きさは1.1mm前後に集中しているものの2.0mm前後のものが数点見られる。これに対して、節の大きさは1.0mm前後に集中している。

「②単節RL縄文」は条幅1.0~3.0mm、節幅1.0~2.0mmで、第12図に示すように、条の大きさはほとんどが1.0~2.0mmの間に集中しているのに対して、節の大きさはほとんどが1.0~1.4mmの間に

(2) 縄文原体

同じくSK1および第Ⅶ層出土の縄文を施文する全ての深鉢・鉢片、すなわち磨消縄文系深鉢・鉢のうち口縁部片合計23点を対象に、押捺痕として残された縄文原体に関する個体数識別調査を実施した¹⁴⁾。縄文原体のパターンとしては「①単節LR縄文」、「②単節RL縄文」、「③単節LR縄文の充填縄文」、「④巻貝擬似縄文」の4種が認められた(写真9)。

調査の結果、これらの組成比は①:②:

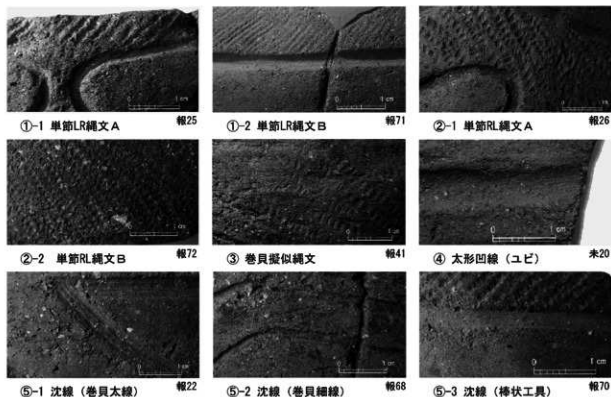


写真9 西山奥谷遺跡出土縄文土器の各種施文手法

集中している。

以上のように、「①単節LR縄文」と「②単節RL縄文」のどちらも節幅の分散よりも条幅の分散の方が大きく、節のほとんどの大きさが約1mmであった。条幅と節幅に関して、「①単節LR縄文」と「②単節RL縄文」の間に大きな差は見られなかった。

「③単節LR縄文の充填縄文」は2点確認されたが、条幅は1.1～1.8mm、節幅は1.0～1.3mmであった。同一個体に施された向き異なる単節LR縄文の間には、わずかに大きさの違いは見られたが、0.1～0.5mm程度の差であり、大きな差はないといえる。

単節LR縄文と単節RL縄文の22点の条と節の大きさを調べた結果、条の大きさと節の大きさの間には正の相関関係が見られた。

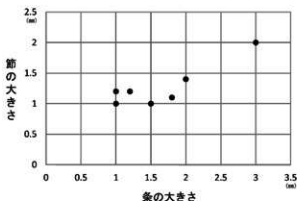
以上、磨消縄文導入期における縄文原体の各パターンを分析した結果、単節LR縄文と単節RL縄文の間には、縄文の条と節の大きさの傾向に特に差が見られないことが明らかとなった。

(3)色調

SK1および第Ⅶ層出土のすべての深鉢・鉢片のうち口縁部片全点、合計120点を対象に、外面色調に関する個体数識別調査を実施した(写真10)¹⁵⁾。パターンとしては「①7.5YR5/4にぶい褐」、「②10YR6/4にぶい黄橙」、「③10YR5/3にぶい黄褐」、「④7.5YR7/4にぶい橙」、「⑤7.5YR6/6橙」、「⑥5YR5/4にぶい赤褐」、「⑦10YR6/2灰黄褐」、「⑧5YR5/6明赤褐」、「⑨7.5YR5/6赤褐」、「⑩5YR4/1褐灰」、「⑪10YR8/4浅黄橙」、「⑫7.5YR4/4褐」、「⑬7.5YR5/6明褐」、「⑭10YR7/6明黄褐」の14種が認められた。

調査の結果、これらの組成比は①:②:③:④:⑤:⑥:⑦:⑧:⑨:⑩:⑪:⑫:⑬:⑭=25%:18%:17%:17%:10%:8%:8%:2%:0.8%:0.8%:0.8%:0.8%:0.8%:0.8% (小数点以下は四捨五入で換算、四捨五入の結果0%になるものは少数第一位まで表示)で、①と④と⑤を含む「にぶい橙色系」¹⁶⁾と、②と③を含む「にぶい黄橙色系」¹⁷⁾が全体の大半を占めることが判明した。

次いで上記パターンと、各文様系統との相関について考察する。磨消縄文系、沈線文系の土器においては、「にぶい黄橙色系」と「にぶい橙色系」の個体数の振り分けに差はほとんどないが、無文系の土器においては「にぶい黄橙色系」の個体数が「にぶい橙色系」の倍以上出土していることが確認できた。さらに、口縁刻目帯系の深鉢には「にぶい橙色系」は確認できなかった。赤みの強い「⑥にぶい赤褐」、「⑧明赤褐」、「⑨赤褐」などは隣接する地域では北部九州と愛媛県南予地域で多い傾向にある。現状、南予地域における中津式併行期の様相は数の中にあり、論述が難しい。ここでは北部九州側からの伝播、ないしは意識的な発色効果の類縁化をある程度志向していた可能性について、指摘するに留めておきたい。



第12図 単節RL縄文の条と節の大きさ



写真10 色調分析作業風景

以上、磨消縄文導入期における色調に関するパターンを分析した結果、色調のほとんどはにぶい橙色系と、にぶい黄橙色系に大別され、無文系と口縁刻目帯系においては「にぶい黄橙色系」が優勢であることが判明した。

(4)器厚

SK1および第Ⅶ層出土の全ての深鉢・鉢片のうち口縁部片全点、合計105点を対象に、口縁端部より約2cm下がった位置での断面測定を前提に、器厚に関する個体数識別計量調査を実施した¹⁸⁾。測定に際しては「①3mm

以下]、「②3.1～4.0mm]、「③4.1～5.0mm]、「④5.1～6.0mm]、「⑤6.1～7.0mm]、「⑥7.1～8.0mm]、「⑦8.1～9.0mm]、「⑧9.1mm～10.0mm]、「⑨10.1mm～11.0mm]、「⑩11.1mm～12.0mm]、「⑪12.1mm以上」の11区分を今回設定する。

調査の結果、以下のような文様系統別の組成比が得られたので報告する。磨消縄文系深鉢は①:②:③:④:⑤:⑥:⑦:⑧:⑨:⑩:⑪=0:0.1:1:12.1:5:0.2:0:0% (小数点以下は四捨五入で換算、以下同様)、阿高系を含む沈線文系深鉢は①:②:③:④:⑤:⑥:⑦:⑧:⑨:⑩:⑪=0:0.1:5:11.3:6:3:1:0:0%、口縁刻目帯系深鉢で①:②:③:④:⑤:⑥:⑦:⑧:⑨:⑩:⑪=0:0:0:1:1:1:0:1:2:0:0%、無文系深鉢で①:②:③:④:⑤:⑥:⑦:⑧:⑨:⑩:⑪=0:0:3:2:14:5:14:3:4:0:1%で、器厚に関しては⑤の6.1～7.0mmを主体とする磨消縄文系と沈線文系、⑤の6.1～7.0mmと⑦の8.1～9.0にピークがある無文系との間に差異を導出できた。この結果は、無文系深鉢のみ、相対的に厚みのある個体が多く製作されていることを示唆している。

つづいて比較分析を目的に、ほぼ併行期にあたる岡山県倉敷市日羽建行田遺跡(間壁・間壁1967)と、標式の岡山県倉敷市中津貝塚(佐藤2004a)の出土事例について計測を行った。調査の結果、前者の日羽建行田遺跡例では器厚幅が3.1mm～11.0mmに取まり、うち④の5.1～6.0mmにピークが認められた。対する標式の中津貝塚例では、器厚幅は6.1～13.0mmに取まり、うち⑦の8.1～9.0mmにピークが認められた。文様系統間では、日羽建行田遺跡例、中津貝塚例とも、あまり差異が存在していない。

以上から、磨消縄文導入期における深鉢口縁部の器厚に関しては、同時期の日羽建行田遺跡よりも西山奥谷遺跡例が若干厚手の例が多く、特に、無文系深鉢にその傾向が顕著であることを把握できた。なお、標式の中津貝塚出土例では日羽建行田遺跡例や西山奥谷遺跡例よりも厚手の個体が多いことが判明したが、これは、中津貝塚ではより新相の中津Ⅰ式新段階～Ⅱ式段階の個体を多く含んでいる点と、平野部とも隣接する臨海型の規模の大きい遺跡では大型個体の割合が高くなる傾向があり、器厚差も、このことを反映している可能性が考えられよう(幸泉2005b)。

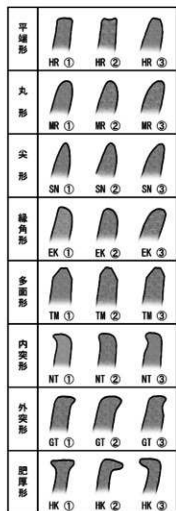
(5) 口唇部形状

SK1および第Ⅶ層出土の全ての深鉢・鉢片のうち口縁部片の全点、合計115点を対象に、第13図の分類一覧に基づき、口唇部の断面形状に関する個体数識別分類調査を実施した¹⁹⁾。

測定の結果はHR形16%、MR形32%、SN形18%、EK形7%、TM形8%、NT形11%、GT形6%、HK形2%であった(小数点以下は四捨五入で換算)。当該遺跡の深鉢口唇部形状に関しては、MR形が最も多く、次いでSN形、HR形が多いといえるだろう。

つづいて参考までに、ほぼ併行期にあたる岡山県日羽建行田遺跡(間壁・間壁1967)と標式の岡山県中津貝塚(佐藤2004a)の比較調査を行った。その結果、日羽建行田遺跡出土土器ではHR形32%、MR形23%、SN形3%、EK形36%、TM形0%、NT形6%、GT形0%、HK形0%、標式の中津貝塚出土土器ではHR形24%、MR形22%、SN形2%、EK形37%、TM形0%、NT形10%、GT形0%、HK形5%であることが判明した。何れもEK形が3割以上の高比率を成し、HR形とMR形がこれに次ぐ組成率を示している。

以上から、西山奥谷遺跡出土の深鉢口唇部形状は、従来の広域編年で認識されてきたEK形が相対的に少なく、MR形、SN形、HR形が多いという地域差を新たに抽出できた。



第13図 深鉢・鉢口唇部の分類

6. 成果と展望

(1) 本稿における視点と成果

以上、本稿では西山奥谷遺跡出土の中津Ⅰ式成立期前後の土器群のうち、これまで未公表であった合計78点の図示公開に加え、既存報告資料を含めた各種考察をゼミの学生達とともに実施し、様々な成果を得ることができた。

編年では、学史上長らく見解の一致をみてこなかった縄文後期初頭という大画期の誕生をめぐる中期末葉との線引き問題に対して、新たに西山奥谷Ⅰ～Ⅲ期(幸泉統一編年のStage 2最新～Stage 3古相:幸泉2018c,p25ほか)を提起し、当該資料群が中津Ⅰ式最古段階(=中津Ⅰ式成立期)を主体とする西瀬戸内では稀有な資料群であることを、改めて明らかにしてきた。

近年の千葉豊による「矢野第1～第3段階」(千葉2016,p163)とは、概ね併行関係を示そう。ただし、本稿と氏等の見解は細かな識別基準が異なっていることに加え、東瀬戸内と西瀬戸内とで

は器種、文様系統のセット関係が異なるため、現状では単純比較が難しい。なかでも、本稿では鈴木 の三原則(鈴木1990・1993)を前提に中期末と後期初頭の線引き、すなわち西山奥谷Ⅰ期とⅡ期の区分を行っており、後者の主体を成す中津Ⅰ式最古相の一群に対して、今回改めて「中津Ⅰ式成立期」と定めている。現状ではまだ、共通理解には至っていない部分である。この点については今後、瀬戸内地方のみならず、広く日本列島規模での比較研究と調整のための議論が不可欠となろう。いずれ別稿を用意することで、議論の決着に向けた次の布石を目指すことにしたい。

さて、文様系統組成の問題では改めて、無文系統の割合の高さを浮き彫りにできた。中津Ⅰ式を中心とする短期間形成資料群の事例としては別途、西山奥谷に隣接する今治市内(旧波方町)の江口貝塚の第1次調査Ⅲ区第2層を挙げることができる(宮本編1991)。幸泉による個体数調査結果からは、同層の全深鉢中に占める無文系の割合は57%であった。もっとも、同層出土土器は西山奥谷遺跡よりも中期末段階の個体を多く含むことから、西瀬戸内の中津Ⅰ式最古段階における無文系の割合が7割弱という、本稿の調査結果は概ね妥当と判断できよう³⁰。このほか、第7図にて各種文様系統の割合を明示できたことも、本稿における大きな成果の一つとなった。

器面調整法では成形、整形工具としてヘナタリ属小巻貝の頻用が特筆されよう。組成率では見かけ上、⑤の内外ナデの割合が最も高かったのだが、これは、巻貝条痕後のナデ仕上げにより条痕が観察できなくなる小片個体が多くを占めるためにはかならないだろう(第8図)。特に磨消縄文系では抽出困難となるが、未1・8・9・19のように内面に条痕を残す例は、大多数が巻貝による。対する沈線文系や無文系では、巻貝条痕をそのまま明瞭に残す例の割合が高くなる。これは、中期後葉における里木Ⅲ式の伝統を継承した中期末～後期初頭段階の特徴であり、一種の地文としての効果が意識されているものと推察されよう(未26・33・39・45・58・66・71・72等)。

近年、石田由紀子は近畿～山陰、中部瀬戸内の中期末～後期前葉前半、福田K2式併行期の無文系土器の調整法に関する集計結果を公表している。うち中部瀬戸内では、福田K2式併行期に至るまで巻貝条痕と二枚貝条痕が併存すると記している(石田2016,p141・150)。しかしながら、本稿において器面調整を担当した高木朋美による詳細な分析結果が明示するように、西瀬戸内では

中期末段階以降、巻貝条痕のみを原則としており、二枚貝条痕は外来等、極少量の土器以外では既に存在していなかった。当該期の西瀬戸内では最終器面調整のみならず、施工工具としてもヘナタリ属巻貝が頻用されるためであろう(写真11)。同等の傾向は、西中国や東九州側でも一定程度認められる。これらの地域では中期終末以降、晩期前葉に至るまで、ヘナタリ属巻貝が採用され続ける。それは、同属の小巻貝が採取可能な汽水域周辺のみならず、島嶼部や山間部に至

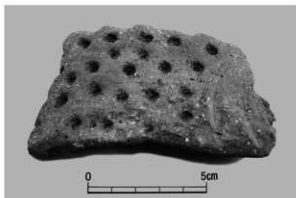


写真11 小巻貝を工具として頻用する中期末土器の例
(今治市亀ヶ浦遺跡出土/幸泉撮影)

るまで、あらゆる遺跡においてである。つまり、その使用にはある種の精神文化的な強い規制が働いていたと推察できるのである。こうした変化は日本海西部、対馬暖流ベルト地帯における刷毛目様の細密条痕や細密二枚目条痕の出現とも連動していることから(幸泉2017・2018c・2019ほか)、今後は、単なる土器製作上の利便性を超越した志向の背景を探る必要があろう²¹⁾。

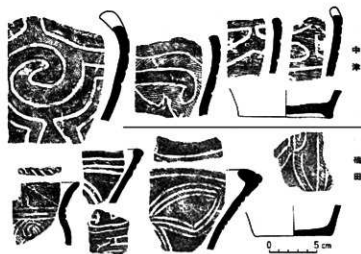
縄文の施文原体については、古くは今村啓爾が論じている。氏は、中津Ⅰ式段階ではLR縄文が優勢だが、中津Ⅱ式段階になるとRL縄文が出現し、福田Ⅱ式併行期にはRL縄文が優勢になるとの見通しを示した(今村1977ab)。その後、千葉豊、富井眞により地方差の介在が指摘されるようになる(千葉1989、富井2000)。そして直近では、石田が具体的な近畿と瀬戸内との地方差に言及しはじめている(石田2008・2014)。石田によると、瀬戸内では中津Ⅰ式段階で既にRL縄文が主体を成すのに対し、近畿地方ではLRが優勢であるとされている。その後、中津Ⅱ式段階の大府府恩智遺跡でRL縄文が75%に達することから、遅くとも、後期前葉の福田Ⅱ式段階にはRL縄文へと転換するとともに述べられている。さらにこの後期前葉の時期、瀬戸内側からの影響により、地方差も払拭されたのだという²²⁾。もっとも同じLR縄文、RL縄文でも器種、系統により条や節、撚り方の態様に一定のバリエーションと法則が内在することを鑑みるならば、未だ、西日本では基礎的な研究基盤が構築されていないことを、まずは課題視すべきであろう²³⁾。今後、本稿で高木が実践した手法と同等の成果蓄積が各地で進むならば、磨消縄文導入期における縄文原体をめぐる諸問題についても、次第に明らかになっていくことだろう。

色調では、担当の畠中航志により今回、計14種類の分類が試みられた。結果からは、在地系とみられる「にぶい橙色群」と「にぶい黄橙色群」が全体の87%と圧倒的主体を示すことが明らかにされている。他の属性分析とも符合した結果であり、西山奥谷遺跡にみる様々な器種、文様系統の土器が大多数、集落近隣で製作、消費されていたことを示している。また外来系としては赤みの強い「明赤褐色」、「赤褐色」、「にぶい赤褐色」の存在が見出された。今回の未公開土器では磨消縄文系の未13・17、沈線文系の33・39、そして無文系の47～49・55・56・62・66・68・69・72～74が相当する。なかでも粗製の無文系統のなかに外来土器が多く混在している事実は興味深い。何故なら「無文」は、地方間の文様差が示す同族、非同族の視覚的な表象に左右されないためである。因みに無文系土器の移動問題については、近隣では徳島県大柿遺跡(光下新町線地点)出土土器群に対する岡山理科大学、白石純による分析結果から既に証明されている(白石2005、幸泉2005)。かつて松本直子は土器の色調に関する視覚性の高さにも注目し、異集団との接触頻度や程度が低くとも伝達されやすいこと、すなわち「土器を目にする機会があればその色調に関する情報は伝達される」との仮説をもとに、後期後葉～晩期前半土器の「志向性」に基づいた西北部九州と朝鮮半島南部との類似化に言及している(松本1996.p75・77)。学史に残る優れた論考であろう。ただ、本例のような無文系粗製土器群の移動に際して、色調はどれほど意識されていたのだろうか。あるいは日用什器については無分別に、違和感もなく活用されていたのか。仮に「無文」にも重要な意味が込められていたとすれば、先の黒色磨研や赤色土器といった特定の精製器種のみならず、あらゆる時期、器種、そして文様系統に対する研究の積み重ねが、今後の発展を導くうえでも強く望まれるところである。

深鉢口縁部の器厚(端部下約2cm位置での計測、集計)に関しても、精製の唐消縄文系と、粗製の沈線文系や無文系との間で、若干の差異を抽出できた。こちらも、かつて松本直子が非視覚的屬性の代表として選定した属性指標である(松本1996ほか)。先の松本による論考では「地理的に近接しており、頻繁に接触する人々のあいだでは、土器の厚さにかんして、「だいたいこのくらい」というような暗黙の了解があると想定される」との仮説に基づいた、小地域集団の抽出が標榜されている(松本1996,p77)。本稿でもこれに倣い、器厚担当の前田友香が西山奥谷出土土器の文様系統間における比較分析を行った。前田はさらに備讃瀬戸、標式の中津貝塚を含む倉敷市内の関連土器群についても比較分析を進め、西瀬戸内との小地域差や集落構造差にまで議論を発展させている。器厚差分析に際しては、個体差や法量差、器種差、胎土差といった様々な制約が伴うことから、従来、純粋な機能差や製作風習の問題にまでは到達し難いとする予察のもと、追究が回避されがちであった。しかしながら、かつての松本による研究成果はもとより、本稿における分析結果が指し示す通り、地道な個体数識別計量調査の積み重ねと、広域的な比較研究の継続により、これまで想像だにできなかった新成果を導出できる可能性が、今後とも充分に期待できることだろう。

深鉢口唇部の断面形状に関しては、口唇部担当の菅百恵により、西山奥谷遺跡ではMR(丸)形とSN(尖)形が全体の約50%を占めることが新たに判明している。従来、中津式に関しては古相でHR(平坦・面取)形が、盛行期ではEK(緑角)形が特徴的と、経験的に周知されてきたのではないだろうか。第14図に示す通り、そもそも1956年に鎌木・木村が示した岡山県倉敷市中津貝塚出土の中津式標式資料(鎌木・木村1956,p197)ではHR形、EK形が目立っている。1969年の松崎・間壁による中津式の解説でも「口縁端をやや内湾させ、先端をとがらすようにしている」(松崎・間壁1969,p251)と表現されており、「近畿、中国、四国の全域にほぼ同様な内容を持って広く分布す

る」(松崎・間壁1969,p252)と結ばれて以降、中津式深鉢の口唇部形状の特質として広く、周知されてきたためであろう。しかしながら、この見出しは西山奥谷遺跡では通用しないことが、昔の分析によって明白となった。同遺跡ではHR(平坦・面取)形は16%、EK(緑角)形も僅か7%に留まったからである。すなわち、中津式では口唇部形状についても小地域差が存在している。かつての松崎壽和、間壁忠彦による指摘は、標式遺跡のある中部瀬戸内周辺に限られた



第14図 鎌木義昌が提示した中津式標式土器(鎌木・木村1956)

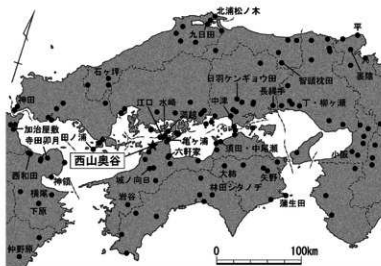
地域でのみ通用する指標であることが今回、明らかとなったのである。学史上、口唇部形状に焦点を据えた比較研究もまた前例がないことだろう。

(2) 愛媛県域における中津Ⅰ式の成立過程をめぐって

かつて、1980年代前半までは愛媛県内には中津Ⅰ式は伝播していないとする推論のもと、縄文後期初頭、東方からの強く、純粋な土器文化の到来が想定されていた(長井1967・1969・1973・1976、犬飼1975、十亀1981ほか)²¹⁾。しかしながら1989年からの江口貝塚の調査で中期後葉、中期末葉、そして後期初頭の土器が層的に、あるいは地点を違えて複数検出されたことで、芸予諸島周辺の地域的独自性は古く、中期後半の在地系土器群にまで遡及することが確実視されるようになった(宮本編1991・1993・1994ほか)。なるほどその目で見れば、過去1950年代に採集されていた四国中央市土居の藤原遺跡出土土器群はもとより、1970年代以降に順次確認されてきた島嶼部の大三島溝越遺跡、伯方島熊口遺跡、馬島亀ヶ浦遺跡やハゼヶ浦遺跡、佐島宮ノ浦遺跡、そして高縄半島先端の水崎遺跡、宮崎遺跡、七五三ヶ浦遺跡等でも、中期後葉～末に遡る資料が種々、混在していることに気付くであろう。この点は、2004年と2008～2010年の幸泉による一連の集大成作業で一層明白となっている(幸泉2004・2008ab・2010aほか)。

第15図には、西瀬戸内周辺における中期末～後期初頭の主要遺跡に関する最新分布図を示した。かつて、1975年に犬飼が予察した「山陽筋から芸予諸島を経て西四国へ伝播」(犬飼1975,p18)といった見通しは、今日でもある程度、的を射ているのかもしれない。現状でなお、芸予諸島～高縄半島周辺では関連遺跡の集中が認められるからである。けれども、より広く俯瞰していくならば、現在では、南は高知、宮崎、鹿児島で、また西側でも山口、豊前、そして大分で、客体的ながらも中津Ⅰ式前後の面的な広がりを把握できる。これらからも、磨消縄文系の成立は芸予諸島を介した東方からの一方向的な流入に基づくものではないとする、新たな推論が成り立つ。

現に、今回の西山奥谷遺跡出土土器群のなかからは東九州由来の西和田式を抽出できている。また、沈線文系や口縁刻目帯系統に関しては九州との関係が、さらに無文系についても、山陰中部、西中国側との関係抜きには説明が困難であろう。そもそも沈線文系や阿高系、口縁刻目帯系などは、その大部分が磨消縄文系伝播以前の「中期由来在地系土器群」に端を発している(幸泉2001)。豊後水道や周防灘にも面した西瀬戸内では、



第15図 瀬戸内周辺における中津Ⅰ式前後の主要遺跡の分布



写真12 沈線文系と阿高系の折衷例

(加治屋敷遺跡第6層出土/北九州市理文調査室蔵/幸泉撮影)

間相互の交流が複雑に絡み合うことではじめて、当該時期の器種、文様系統組成がセットとして成り立っていたと理解すべきではないだろうか。

(3) 課題と展望

以上の事実認識のもと、最後に中津Ⅰ式成立期をめぐる今後について展望しておく。

1977年、今村啓爾により整備された縄文後期初頭の広域基準、関東周辺における称名寺Ⅰa式(今村1977ab)もまた、その一部の属性が西日本の中津Ⅰ式と酷似している。従ってその成立経緯についても、加曾利E式における内在的变化のみから説明することは難しいだろう。つまり中津Ⅰ式と類縁関係にある称名寺式の誕生プロセスもまた、搬入土器を含めた西日本からの影響なくしては論ずることが至難であることから、やはり、西日本における中期後葉以降の動向を踏まえた列島規模での考究が不可欠ということになる。

関西周辺では、北白川C式に代表されるブレ磨消縄文系土器群を母胎に、中津Ⅰ式の成立過程をある程度論ずることが可能という理由から、これまで数多くの論文が発表されてきた。紙幅の都合、ここでは詳述はしないが、それらの多くは関西周辺以外の評価を略記、あるいは省略してきた点で別途、課題視される側面がある。無論、後期初頭の成立問題が関西周辺のみで完結できるとは到底考えられないからである。仮に、西日本各地の中期由来在地系土器群の評価を軽視し、議論を、磨消縄文系の成立のみに矮小化させたとしても、地方を限定させた論法のみでは地域間関係の本質をめぐる議論に到達することは不可能なはずである。このことは、既に幸泉自身が論じてきたところであるが(幸泉2008abほか)、中津Ⅰ式土器の成立問題で本来重視すべきは、九州や中四国をも含めた広域地方間における全ての器種、文様系統組成に対する徹底した関係解明であり、当面は、これに尽きるであろう。鈴木の三原則を貫徹した磨消縄文意匠が、そうした広域間における情報交換、あるいは連帯システムの確立とある程度連関し合い、それらを反映、表象していたと仮定するならば、東北、関東、中部、東海、北陸の諸圏をも含め、磨消縄文の完成は中津Ⅰ式最古段階併行期の極めて短期間のうちに、列島内部で急速に浸透した結果、実現したと

解釈するのが妥当であろう。本稿の写真6、報25のような中津Ⅰ式最古段階の例と特徴が酷似する土器は、実のところ東日本でも一定量、存在しているのである。さらに近年の東日本では、関東南西部を中心にその前段、北白川C式Ⅳ期併行と表現される西日本由来土器の存在さえ、指摘されはじめている(石井2016、加納2020ほか)。故に、まずは中津Ⅰ式最古段階に関わると見做される土器を列島規模で徹底的に抽出する作業が不可欠となるのである。そのうえで、各地の在来土器との共伴関係や、分布上の広がりに関する追跡を重ねていくことにより、必ずや、今後の新たな展望が描き出せることだろう。

さらにもう一点、ぜひ触れておきたいのが「東日本縄文文化複合体西漸説」(渡辺1965・1975・1983ほか)に関わる問題である。渡辺誠による理論もまた、そもそも当該期前後における磨消縄文手法の西日本への影響関係を基盤に、東から西への伝播モデルの構築に繋げている。以降、半ば定説化されてきた有名な学説である。氏の指標は、磨消縄文以外にも低地部への集落の進出や住居形態の変化、貯蔵穴の増加、扁平打製土掘具類の出現に代表される石器組成の変貌、土偶、石棒等の儀器類や装身具類、埋設土器の増加など、多岐にわたっている。さらに、こうした大画期を促した要因として、列島規模での気候変動(寒冷化)、あるいは生業形態の抜本的な変化に起因する可能性が、今日なお、提起され続けているのである(渡辺1965・1983、今村1977ab、安田1990、泉1991、家根1992、矢野1999、松尾2008、千葉2013、長田2016等)。けれども、何れも推論の域を脱し切れてはいない。むしろ、各地で関連資料が膨大に蓄積されてきた今日、同時に、多くの矛盾点が露呈しはじめているのも事実であろう。近年の北白川C式や中津Ⅰ式の関東進出は、その典型事例といえるはずである(石井2016、加納2020ほか)。

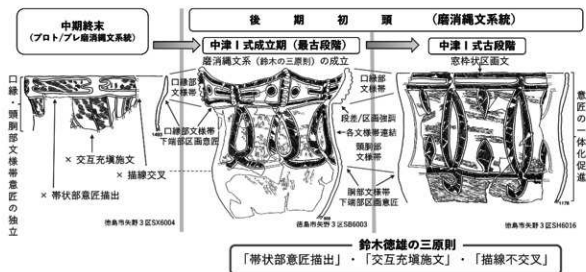
ここでは多くを触れないが、最後に主張しておきたいのは、上記学説への無批判に近い安易な引用を控えること、つまりは「東日本縄文文化複合体西漸説」という過去の呪縛からの脱却である²⁵⁾。氏が約半世紀前に提唱した伝播モデルに対しては、今日なお、傾聴すべき点が少なくない。ここでも無論、上記指標の全てを否定するつもりはない。けれども今日、渡辺の学説に安易に迎合し続けるだけでは、未来に向けた研究進展もまた期待できないであろう。今後、我々が目指すべきは列島各地における中津Ⅰ式創造に向けた様々なアーキテクチャの実態と、それらを繋ぐ地域間における連鎖関係の解明であり、以上を、公平な目で、地道に追究し続ける姿勢にこそありはしないだろうか。

本稿で試みてきたような各種の徹底した属性研究と、その延長上にある派生的課題や主張の数々が、今後、学界で再び顧みられる日が来ることを期待したい。

(2022年8月31日)

註

- 1) 本稿では磨消縄文完成直後の段階に対して、2008年の石田由紀子による「中津(式)成立期」の表現とを区別して、特に「中津Ⅰ式成立期」と仮称したい。既存の編年観でいうところの中津Ⅰ式古段階のうちの、さらに古相(最古段階)を指す(第16図参照)。幸泉統一編年のStage 3 最古相に相当する(幸泉2017ほか)。
- 2) 愛媛県教育委員会「3教文第619号」認可。
- 3) 1969年、長井数秋は六軒(家)Ⅰ・Ⅱ式と上野式を整備するなかで、この市倉遺跡出土土器片を上野式とし、当時は中津式と福田Ⅱ式との間に位置付けている(長井1969,p37)。今日的には北白川上層式3期、加曾利Ⅱ式併行から彦崎Ⅱ式古段階、幸泉統一編年のStage 12～13に相当する資料である。
- 4) 鈴木徳雄は称名寺式および中津式成立の指標として「帯状部意匠描出」・「交互充墳施文」・「描線不交叉」の三原則を提起している(鈴木1990ab・1993ほか)。
- 5) もっとも、口頭部の磨消縄文において三原則が貫徹されていたとしても、同個体の胴部下端部意匠でのみ一部未成立といった土器も散見できる。いわんや沈線文系統に至っては、そもそもそうした規制が厳守されないまま後期前葉へと推移しているのである。こうした部位、文様系統別のきめ細やかな基準整理が必要であり、そのための別稿を用意する必要があると現在思っている。
- 6) 別途、泉拓良は1981年刊行の『縄文土器大成』のなかで後期初頭前後における粗製土器の成立について言及し、有文土器とは異なり、「九州地方の土器が関係したと推測」できると述べている(泉1981,p153)。また1994年、瀬戸内の中期末土器群について論じた矢野健一も従来、瀬戸内以東からの影響のみで論じられてきた中津式の成立問題について、瀬戸内地方との関係を視野に入れるべきと主張している(矢野1994b,p13)。
- 7) 幸泉2014参照。
- 8) 西和田式のなかにも口唇部を刻まない個体は一定量存在している。
- 9) もっとも東九州の西和田式も阿高系に多い赤褐色～赤灰色を呈してはならず、鈍い黄橙色～黄褐色系統を示す個体が多いことは古くから認識されている(田中1981ほか)。
- 10) 面取り調整を加える細密2枚貝条痕の無文系深鉢は中津Ⅰ式併行期前後の山陰地方中部域でも散見できる(幸泉2019)。
- 11) 同パターンの意匠を描く磨消縄文系土器は、遠く佐賀県唐津市の徳蔵谷遺跡SX611でも出土している(田島編



第16図 中津Ⅰ式成立期 (実測図：藤川編2003『矢野遺跡(Ⅱ)』より一部再トレース)

- 1996・幸泉2017)。
- 12) 高根県松江市の北浦松ノ木遺跡NR01で巻貝擬似縄文土器が出土している(廣濱編2016)。もともと口唇を刻まないM類型である。
- 13) 愛媛大学法文学部生、高木明美の調査結果に基づく。
- 14) 愛媛大学法文学部生、高木明美の調査結果に基づく。
- 15) 愛媛大学法文学部生、畠中航志の調査結果に基づく。
- 16) 「にぶい褐」、「にぶい橙」、「橙」の色の差異は少ないため、ここでは「にぶい橙色群」と表記する。
- 17) 「にぶい黄橙」と「にぶい黄褐」の色の差異は少ないため、ここでは「にぶい黄橙色群」と表記する。
- 18) 愛媛大学法文学部生、前田友香の調査結果に基づく。なお調査では、口縁端部より2cmの位置において沈線施文やイレギュラーな段差等が存在する個体についてはこれを回避し、前後の平均的な位置で測定を行っている。
- 19) 愛媛大学法文学部生、菅百恵の調査結果に基づく。
- 20) さらに後続の中津Ⅰ式新段階～同Ⅱ式段階を含む江口貝塚Aトレンチ第5層下部(宮本編1994)や広島県福山市洗谷貝塚3区第2層(小都編1976)でも無文系が7割前後の高比率を占める。
- 21) 因みに、ヘナタリ属小巻貝は二枚貝の代替工具とは成り得ない。放射肋を伴うサルボウ、アカガイ、ハイガイ等のアナダラ属二枚貝は、一次成形時の歪んだ粘土表面を均らす目的で使用される工具である。対する小巻貝は器表面に生じた微細な凸部を掻取るための工具であり、器面全体を均等化させるほどの調整には向きである。無論、掻取り調整に小巻貝を用いる必然性もない。事実、縄文中期末葉まで登場しないことから、その目的は当初、最終的な器面装飾を兼ねていた可能性が想起されるだろう。こうした工具間の目的差を示唆する事例として、ここでは写真13、報52の巻貝条痕表面に偶然付着した二枚貝腹縁圧痕の存在を挙げておきたい。
- 22) なお石田由紀子は同じく近畿～山陰、中部瀬戸内の比較検討結果から、「磨消縄文手法の成立によって縄の太さが細くなる傾向」を指摘すると同時に、撚りの方向については「中期末以来の伝統を保持しており、大きな変化はない」こと、また「中津式の成立は基本的には中期末以来の在地の集団が母体となっている」と結んでいる(石田2016,p141)。
- 23) 無節縄文については今治市馬島の亀ヶ浦遺跡(谷若・楠・真鍋編1999)出土のプレ磨消縄文系土器にも窺えるが、愛媛県域では現状、極めて稀少といえるだろう。
- 24) ただし愛媛県南部の宇和島市岩谷遺跡でも既に中津Ⅰ式が出土していた。この点を十亀は「中津Ⅰ式の離れ島」と評して例外的存在と見做している(十亀1981,p14)。
- 25) 縄文後期初頭、中津Ⅰ式が西日本周辺で広域分布を示す時期は、近年、幸泉が追究する対馬暖流ベルト地帯における無文系優勢圏の西瀬戸内への急拡大を示す時期でもある。つまり、中津Ⅰ式土器様式の成立は従来から指摘のあるような東方からの一方向的な情報伝播や集団移住によるものではあり得ない。2008年、松尾洋次郎は中津式土器群の成立過程を論じた際に、広域分布の表象として文様が重視され続ける一方、伝播と受容には地域差があることを指摘し、「土器製作に関わる技術・技法という視点にこれからの研究においてはさらに目をむけていく必要がある」と述べている(松尾2008,p484-485)。

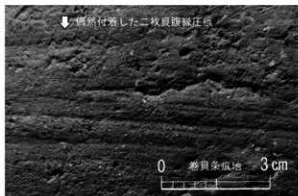


写真13 巻貝条痕地に偶然付着した二枚貝腹縁圧痕
(西山典谷/報52口縁部表面/愛媛県教委蔵/幸泉撮影)

参考文献

- 荒木隆宏 2003 「阿高式土器の細分と編年」『先史学・考古学論究Ⅳ』龍田考古会 35-63頁
- 石井 寛 2016 「関東南西部の称名寺式土器」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館 72-84頁
- 石田由紀子 2008 「中津式・福田Ⅱ式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション 634-641頁
- 石田由紀子 2012 「縄文原体からみた西日本縄文時代後期前葉の社会構造変化」『関西縄文時代研究の新展開』関西縄文文化研究会 93-105頁
- 石田由紀子 2014 「縄文原体からみた土器型式変化とその背景」『考古学ジャーナル』№660、ニュー・サイエンス社 16-20頁
- 石田由紀子 2016 「北白川C式から中津式への変遷とその背景」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館 139-150頁
- 泉 拓良 1981 「縄文後期の土器 - 近畿・中国・四国地方 -」『縄文土器大成』3、講談社 153-155頁
- 泉 拓良 1982 「西日本縄文土器再考 - 近畿地方縄文中期後半を中心に -」『考古学論考・小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社 75-99頁
- 泉 拓良 1990 「関西地方の中期最終末土器群」『特集・称名寺式土器に関する交流研究会の記録』横浜市埋蔵文化財センター 140-148頁
- 泉 拓良 1991 「第3章 縄文文化」『考古学 - その見方と解釈 - (上)』筑摩書房 75-114頁
- 稲村昌嗣 1990 「加曽利E式系列の土器群」『特集・称名寺式土器に関する交流研究会の記録』横浜市埋蔵文化財センター 9-16頁
- 犬飼徹夫 1975 「愛媛県越智郡大角鼻海岸採集の縄文土器とその考察」『西四国』第5号、西四国郷土研究会 12-29頁
- 犬飼徹夫 1982 「狩猟・漁撈の生活と文化」『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』愛媛県史編纂委員会 37-214頁
- 犬飼徹夫・長井数秋・八木武弘・岡田敏彦・西田栄・吉本拔 1986 「縄文時代遺跡解説」『愛媛県史 資料編考古』愛媛県史編纂委員会 43-136頁
- 犬飼徹夫 2004 「土器型式の成立・受容・変容の考察 - 西日本磨消縄文有文土器の場合 -」『考古論集』河瀬正利先生退官記念事業会 173-184頁
- 井上スズ子・松本和子・越智喜範 1967 「愛媛県周桑郡三芳町六軒家と縄文式土器について」『西農史学』第7号、愛媛県立西条農業高校史学部 20-27頁
- 井原忠昭編 1980 「大三島・伯方島本四連絡道路埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)」愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 今村啓爾 1977a 「称名寺式土器の研究(上)」『考古学雑誌』第63巻第1号、日本考古学会 1-29頁
- 今村啓爾 1977b 「称名寺式土器の研究(下)」『考古学雑誌』第63巻第2号、日本考古学会 22-60頁
- 岩田克之・宇藤栄晃・幸泉満夫 2018 「愛媛県周辺域における未公開縄文土器群の研究(2) - 文化財保管庫に埋もれていた博物館資料の再整理を通じて -」『人文学論叢』第20号、愛媛大学人文学会 85-92頁
- 内山修三 2012 「阿高式系土器の編年の位置付け - 縄文時代中期後半から後期初頭における九州の土器編年 -」『考古論叢Ⅰ』千葉大学文学部考古学研究室 237-256頁
- 岡田敏彦編 1981 「一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財センター調査報告書Ⅱ」愛媛県教育委員会
- 小郡 隆福 1976 「洗谷貝塚」広島県福山市教育委員会・洗谷貝塚発掘調査団
- 加納 実 2016 「関東東部の中期最終末から後期初頭の土器」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館 85-92頁
- 加納 実 2020 「千葉市若葉区餅ヶ崎遺跡における異質な土器群 - 近畿地方北白川C式土器群の紹介を中心に -」『貝塚博物館紀要』第46号、千葉市立加曽利貝塚博物館 1-6頁
- 鎌木義昌・木村幹夫 1956 「中国」『日本考古学講座』3、河出書房 188-201頁
- 鎌木義昌・高橋護 1965 「縄文文化の発展と地域性9 瀬戸内」『日本の考古学』Ⅱ、河出書房 230-249頁

- 河西 学 2016 「縄文時代中期末～後期初頭土器の内眼観察からみた胎土の特徴」〔称名寺貝塚と称名寺式土器〕横浜市歴史博物館 61-64頁
- 木太久守編 2005 「加治屋敷遺跡2」北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
- 木村剛朗 1983 「土佐における後期縄文文化について」〔高知の研究〕1、清文堂 128-189頁
- 小泉翔太 2021 「北白川C式の成立における地域間関係」〔縄文時代〕第32号、縄文時代文化研究会 53-82頁
- 幸泉満夫 1999 「縄文土器」・「石井国友遺跡出土の縄文後期土器について」〔石井国友遺跡〕愛媛県今治市教育委員会 80-103・111-113頁
- 幸泉満夫 2000 「縄文時代」〔蒲刈町誌 通史編〕広島県蒲刈町誌編纂委員会 23-48頁
- 幸泉満夫 2001 「西日本縄文後期土器組成論 - 瀬戸内地方における沈線文系土器に関する研究 -」〔考古学研究〕第48巻第3号、考古学研究会 85-105頁
- 幸泉満夫 2004 「西日本瀬戸内」〔中津式の成立と展開〕中四国縄文研究会 53-62頁
- 幸泉満夫 2005a 「中期末の調査と成果」〔大柿遺跡(町道光下新町線)〕徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 29-75頁
- 幸泉満夫 2005b 「煮湯器の多様性と遺跡の立地環境」〔考古論集〕川越哲志先生退官記念事業会 151-164頁
- 幸泉満夫 2008a 「西からの視点」〔関西の縄文中期末土器〕関西縄文文化研究会 79-94頁
- 幸泉満夫 2008b 「中国・四国地方における縄文中期末土器集成」〔関西の縄文中期末土器〕関西縄文文化研究会 1085-1108頁
- 幸泉満夫 2010a 「西日本沈線文系土器集成Ⅳ」〔研究報告〕第36号、山口県立山口博物館 43-84頁
- 幸泉満夫 2010b 「四国」〔西日本の縄文土器 後期〕真陽社 69-112頁
- 幸泉満夫 2010c 「コラム3 徳島県矢野遺跡」〔西日本の縄文土器 後期〕真陽社 113-114頁
- 幸泉満夫 2012 「西日本在来系縄文土器の研究」〔縄文時代〕第23号、縄文時代文化研究会 43-69頁
- 幸泉満夫 2016 「縄文土器にみるもう一つの地域間交流 - Stage 1 : 縄文中期末～後期初頭併行期を事例として」〔中四国地方における縄文時代の地域間交流〕中四国縄文研究会 9-25頁
- 幸泉満夫 2017 「縄文文化解体期をめぐる土器資料群の研究1 - 北部九州沿岸域における“文様のない粗製深鉢群”の再検証 -」〔古文化談叢〕第79集、九州古文化研究会 57-118頁
- 幸泉満夫 2018a 「須田・中尾瀬遺跡出土縄文土器の分析」〔須田・中尾瀬遺跡〕香川県教育委員会 180-190頁
- 幸泉満夫 2018b 「縄文後晩期における九州系土器の中国・四国地方への波及」〔中四国の外来系土器〕第29回中四国縄文研究会鳥根大会資料集 23-32頁
- 幸泉満夫 2018c 「未評価出土文化財をめぐる博物館資料学の実践研究(1) - 縄文文化解体期の東山四国域における無文系粗製深鉢群の再検証(前篇) -」〔法文学部論集 人文学編〕第45号、愛媛大学法文学部 23-46頁
- 幸泉満夫 2019 「縄文文化解体期をめぐる土器資料群の研究(2) - 山陰中部域における“文様のない粗製深鉢群”の再検証(前篇) -」〔古文化談叢〕第83集、九州古文化研究会 1-45頁
- 坂本嘉弘編 1979 「石原貝塚・西和田貝塚」大分県教育委員会・宇佐市教育委員会
- 佐藤寛介 2004a 「中津式の実像 - 標識資料の整理から -」〔中津式の成立と展開〕中四国縄文研究会 1-14頁
- 佐藤寛介 2004b 「倉敷市中津貝塚出土の縄文土器」〔研究報告〕23・24合併号、岡山県立博物館 1-30頁
- 澤下孝信 1983 「中津式土器について」〔野多目括渡遺跡〕福岡市教育委員会 54-61頁
- 澤下孝信 1991 「土器様式伝播考 - 西日本の縄文時代後期磨滑縄文土器を中心として -」〔古文化談叢〕第25集、九州古文化研究会 15-42頁
- 澤下孝信 1994 「九州・四国磨滑縄文系土器」〔季刊考古学〕第48号、雄山閣 74-77頁
- 塩地潤一・松永正大・古川 匠編 2008 「横尾貝塚」大分市教育委員会
- 白石 純 2005 「大柿遺跡出土土器の胎土分析」〔大柿遺跡(町道光下新町線)〕徳島県教育委員会・財団法人徳島県

- 埋蔵文化財センター 359-366頁
- 鈴木徳雄 1990a 「称名寺式土器」[特集・称名寺式土器に関する交流研究会の記録]横浜市埋蔵文化財センター 17-24頁
- 鈴木徳雄 1990b 「称名寺・堀之内1式研究の諸問題」[縄文後期の諸問題]縄文セミナーの会 1-78頁
- 鈴木徳雄 1993 「称名寺式の変化と中津式土器 - 型式間交渉の一過程 -」[縄文時代]第4号、縄文時代文化研究会 21-51頁
- 鈴木徳雄 2007 「称名寺式土器研究の諸問題 - 南関東地域の資料を中心に -」[中期終末から後期初頭の再検討]縄文セミナーの会 6-21頁
- 十亀幸雄 1981 「愛媛県における中津式土器について」[遺跡]第20号、遺跡発行会 1-16頁
- 十亀幸雄 1982 「北条市前田池遺跡出土の縄文後期土器」[遺跡]第22号、遺跡発行会 66-82頁
- 高畑知功 1993 「矢部奥田遺跡」[山陽自動車道建設に伴う発掘調査]6、岡山県教育委員会 141-326頁
- 田島龍太編 1996 「徳蔵谷遺跡(3)」佐賀県唐津市教育委員会
- 田中良之 1981 「阿高式土器」[縄文文化の研究4]雄山閣 103-111頁
- 田中良之 1982 「磨消縄文土器伝播のプロセス - 中九州を中心として -」[古文化論集]森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会 59-96頁
- 谷口哲一編 2011 「田ノ浦遺跡Ⅱ」山口県埋蔵文化財センター
- 谷若倫部編 1996 「糸大谷遺跡」愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 谷若倫部・植真衣子・真嗣昭文編 1999 「馬島亀ヶ浦遺跡・馬島ハゼヶ浦遺跡」愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 玉田芳英 1989 「中津・福田Ⅱ式土器様式」[縄文土器大観4]小学館 262-265頁
- 玉田芳英 1990 「中津式土器」[特集・称名寺式土器に関する交流研究会の記録]横浜市埋蔵文化財センター 149-158頁
- 千葉 豊 2013 「第3章地域の様相8 中国・四国」[講座日本の考古学3]青木書店 475-507頁
- 千葉 豊 2016 「関西地方の後期初頭土器群 - 研究現状と課題 -」[称名寺貝塚と称名寺式土器]横浜市歴史博物館 161-170頁
- 中四国縄文研究会徳島実行委員会編 2004 「中津式の成立と展開」中四国縄文研究会
- 中四国縄文研究会山口実行委員会編 2007 「縄文後晩期の西部瀬戸内地方」中四国縄文研究会
- 富井 眞 2000 「西日本縄文後期初頭土器の再編へ」[考古学研究]第47巻第1号、考古学研究会 34-81頁
- 富井 眞 2005 「遺構一括出土の縄文土器の位置づけ - 西日本縄文中期後半土器編年の基礎的作業 -」[長縄手遺跡]岡山県教育委員会 64-72頁
- 長井数秋 1967 「三芳町六軒家並びに世田山龍遺跡出土の遺物についての若干の補足的考察」[西農史学]第7号、愛媛県立西条農業高校史学部 33-35頁
- 長井数秋 1969 「北四国地方における後期縄文式土器の様相」[研究紀要]第四号、愛媛県立西条農業高等学校 31-43頁
- 長井数秋 1973 「愛媛県下の縄文遺跡に関する先史地理学的一考察」[ソーシャル・リサーチ]第2号、ソーシャル・リサーチ研究会 28-44頁
- 長井数秋 1976 「芸予諸島における縄文式土器についての一試論」[ソーシャル・リサーチ]第5号、ソーシャル・リサーチ研究会 69-88頁
- 長井数秋編 1981 「愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ、愛媛県教育委員会
- 長井数秋 1986 「六軒家遺跡」[愛媛県史 資料編考古]愛媛県史編纂委員会 53-55頁
- 長井数秋 1995 「愛媛県大三島町満越遺跡」[愛媛考古学]第13号、愛媛考古学協会 35-63頁
- 長井数秋編 2001 「黒河コレクション・丹原町教育委員会コレクション(考古資料)」愛媛県丹原町教育委員会

- 長井敦秋 2009 「熊口港遺跡と出土遺物」『ふたな』第6号、愛媛県考古学研究所 1-10頁
- 長田友也 2016 「後期初頭にみる精神文化の推移」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館 47-56頁
- 中野良一編 1994 「四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ - 鶴来が元遺跡 -」愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 西田 栄 1961 「愛媛県下の縄文式土器についての一試論」『紀要』第一部第六卷第二号、愛媛大学 163-182頁
- 廣濱貴子編 2016 『北浦松ノ木遺跡』島根県松江市教育委員会
- 兵頭 勲編 2008 「猿川西ノ森遺跡」愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 藤川智之編 2003 「矢野遺跡(Ⅱ)」徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター
- 穂積裕昌 1992 「縄文時代後期の壺形土器 - 中津・福田K 2式土器に伴う双耳壺を中心に -」『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会 209-223頁
- 間壁忠彦・潮見 浩 1965 「縄文文化の発展と地域性 8 山陰・中国山地」『日本の考古学』Ⅱ、河出書房 211-229頁
- 間壁忠彦・間壁茂子 1967 「岡山県昭和町日羽ケンギョウ田(建行田)遺跡」『倉敷考古館研究集報』第3号、倉敷考古館 1-20頁
- 松尾洋次郎 2008 「中津式土器群の成立過程 - 口縁部文様帯作出技法の広域化について -」『文化財学としての考古学』泉拓良先生還暦記念事業会 471-498頁
- 松岡文一 1956 「西条市船形市倉縄文遺跡」『東洋史談』第49號、西條史談会 4-8頁
- 松崎壽和・間壁忠彦 1969 「西日本」『新版考古学講座3』雄山閣 249-268頁
- 松本直子 1996 「認知考古学的視点からみた土器型式の空間的変異 - 縄文時代後晩期黒色磨研土器を素材として -」『考古学研究』第42巻第4号、考古学研究会 61-84頁
- 眞鍋昭文・池尻伸吾編 2012 「西山奥谷遺跡2次」愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 三森定男 1938 「先史時代の西部日本 二 瀬戸内地帯の先史時代文化」『人類学・先史学講座』第二巻、雄山閣 35-55頁
- 水原岩太郎 1920 「岡山縣浅口郡黒崎村 中津貝塚發見 縄紋式土器模様」洗心齋
- 宮本一夫編 1991 「江口遺跡第一次調査」愛媛大学法文学部考古学研究室
- 宮本一夫編 1993 「江口貝塚Ⅰ」愛媛大学法文学部考古学研究室
- 宮本一夫編 1994 「江口貝塚Ⅱ」愛媛大学法文学部考古学研究室
- 安田喜憲 1990 「人類破滅の選択」学習研究社
- 家根祥多 1992 「定住化と採集活動」『新版 古代の日本⑤ 近畿Ⅰ』角川書店 51-72頁
- 矢野健一 1993 「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」『江口貝塚Ⅰ』愛媛大学法文学部考古学研究室 157-175頁
- 矢野健一 1994a 「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代古備』第16集、古代古備研究会 1-15頁
- 矢野健一 1994b 「縄文後期における土器の器種構成の変化」『江口貝塚Ⅱ』愛媛大学法文学部考古学研究室 155-168頁
- 矢野健一 1999 「後氷期への適応と定住の完成」『縄文世界の一万年』集英社 41-56頁
- 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号、先史考古学会 29-32頁
- 吉田 寛・坂本嘉弘 1997 「下原遺跡」大分県教育委員会
- 渡辺昌宏 1994 「縄紋時代後期初頭の集団関係 - 大阪湾南岸地域の状況 -」『研究報告』第3集、弥生文化博物館 15-29頁
- 渡辺 誠 1965 「縄文土器の様式構造」『あるかいあ』第6号、三考会 4-10頁
- 渡辺 誠 1975 「第5章第3節 縄文農耕論への新しい視角」『京都府舞鶴市桑阿下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会 317-320頁
- 渡辺 誠 1983 『縄文時代の知識』東京美術

挿図版典拠

第1図：幸泉作成。第2～4図：幸泉指導のもと考古Ⅱゼミ生実測・採拓、幸泉編集清浄。第5～7・13・15図：幸泉作成。第8～12図高木作成。第14図：鎌木・木村1956より一部改変、第16図：藤川編2003を基図に一部再トレース・作成。写真1～13：幸泉撮影・レイアウト(各掲載許可済)。

本論文の内容には、令和三～四年度におけるJSPS日本学術振興会科学研究費19K01097(基盤研究C)助成事業「対馬暖流ベルト地帯周辺における縄文農耕の実証化に向けた関連石器類の広域基盤研究」(研究代表者：幸泉満夫)と関連した研究成果の一部が含まれている。